英氏一蝶画譜

12
881
38

彼院乃もとに出て女御んころは宮に給ひんは字をはうろ
ひさまろを宮しさを給へきさ給ふなれ松はしとや此注まゝ
し　家　むとに越て乃也源の蒸(ムシロ)りち給ふまゝちやらひ
ゐ女をひ給ひんとの此かの隙とゐくるたれるの子と
の小侍従の詞也　細　源乃給んころは所縛(ショバク)と中たる也
此ころをそもろもし抱くしをかそれのろも字ろくあつ給
る連きとてそ　家　ものくしくやん柏木此中納言は奴て
ゆそのゑろとふくとこうもそ世の女め也　河　柏木此まて
まてしめを参議右衛門督(サイエモンノカミ)後(ゴ)権中納言と申しく承り
上古ハ位ニ随て袍(ハウ)の色も浅深(センシン)ある也　廣明(ヒロアキラ)ハ天暦
五年二月任権中納言叙従三位(ジヨジウ)　元参議正四位下右大弁　時九条右
大臣選(エラ)ハル後撰集(ゴセンシウ)ニ
とひさや君か衣とゐきくへくさふの世乃ちろさ也んとハ

花
栢木の衛門督中納言に任ず中納言ハ三位相当(サウタウ)也
三位乃袍ハ色浅紫と云也　弄　中納言になりても
四位参議より三位になる也　細　中納言にて昇進(セウシン)なき
事とや
いふかひなくさゆりくれるくちをしさに　宗　栢木の心也
さゆりかなる口こりハとを小侍従かたらひとり
細　小侍従かたる也
えんひきて行て　宗　栢木ハ小侍従よりひまをなき給也
今ハよしなしとめしるハ心も少しや　宗　栢木只(タヽ)悦事
とふ小侍従かりの給也
さてかくはるかに物のひまに帯ちかくてかしこく見よろ
いかにもあるハ心もしもいかにしていゑたのしさもいへくさもら
かり給へ　宗　小侍従より給やうにいふかひも物のよきさを見

給ふ女三宮ちかつきなきてこのこゝろハ我にひのらふ
あさましとおもやうしまさえかれとや
いとおほえたる心をもとへあらうし給へ　おほえたる心
心を　宗　あひなましきものをいひふるに行てもとや
まつらうよしと給へ　宗　栢木ハ四ほとりしく小侍従よ
見へしとや
いとおそろしくそれハとひられもちて給うとの給へハ
宗　栢木ハ源のおそろしさに女三宮ハよきことをといひつゝ
まいるとや　相手ひの宿とをいかと給へしや
られまもとおほえたる心をもいかにしんやともしつを
さうけんともおほしよりあるゝれ　細　小侍従か相
あふしに東りつくんとちかて　宗　小侍従か腹立(ハラタツ)也
弄
小侍従あふしに帯の事をへまかつくんとやうく

もてあそひて　箕　柏木詞也　細同
おまへにもさるへくてこそかうひきとゝめ給へれ世にはいとたのもしけれ
なき物をとのみこそ　箕　ことくしくいひなすや
女御后にもあまたありてあそひ給ひしかはかくいへるや
箕　手習ありて八そのれ御ためにもとかくつらきことをとわつらふ
ひそかなる也　河　又条二条后は業平と親しき后にて御達
おほえあると云はて後撰にそのことをいひて後京極の
をかはゆかりしかは良のみこ院ぬ事とも
しつかにしたる身をとはかしてもあはれとそかし
細　二条后なとも此例たるへし
新　ゐまくひやこそせしは業平清和女御によく
ましてその后ありしか後はまたいとたくひなく
あかされと　細　女三宮也

うちつくはいのちのかきりとおもひたのむるに　細　上ゑより
とさま給　孤　柏語六条院よりそとさまにて外家
八かくあしこさやうなれとおもひよりぬるをとへ
なと　箕　女三宮のことをさらにもきこえひとすちをおもひそめて
こそれにたまふ御ためなれと内々にハ源氏のためかくつらへらや
ましさすみの此物語のさまとや
院のあまたの御中に又かくひとかたならぬ
宮なと給へる　箕　朱雀院の御子達の中に女三
宮おほしめしたる宮とも也　細　朱雀院也
さしもひとしからぬきはの御方々
めさましきにたくひなき育ぬへくこそいとこうろうき給
つるや　細　御后上るも此同腹(ドウハイ)なとひとしなみや
箕　上ゑ上臈にて花散里なと女三宮ためにもおしへさせ

あしねともそまたにさへとさま給ふとのみのうち　柏
木れいく思ひしとや
世中ハいと常なき物を一さまにおもひはなちて　涼藪(スヤブ)文
古　世しおもて難(ナン)なきとおもし　常なれば世をかなしとおもひはなち
ちしあたくはへきるとあるおとなの給ひうまとの給
へも　箋　諸る法もなくやうなる也　倍語(ゾウゴ)りなりきなに
とおもひおもし　細　つひきり給ふそとや
人は物とさま給へる法ありさ御とて　箋　小侍従か詞也
女三宮の六条院のかくは物とされ給ふとて　柏
木れはくハ我るよ紀法有様よありつま給りんつと也
めそ思ひにあしたぬ給へきまや八侍らん　細　と
法しのられるかにおもひき給へきものそてもおなし　と也
これ思ふのつはれはありさ御もも侍らさめりたく法なし

ろとあくらぬまくようりくおもしきこえんよりハおやさ
まにとゆへり常なし給ひしかなことにさらそひかり女
えうきも給さぬれあハなき紀法おもしめおもにあはんや
あそく是をもしなまつを　細　おやさ御子とおもし給へるよ
つまの給しかバ霧散(テウアイ)れたるそくるしかりさ御とや
弘　常れいつるとも子そしかりて親さまにと云や
箋　女三宮と源との中ハ先世の宿縁(シユクエン)なくの事也
それ上皇帝の法より八月二十なく源と親さ御なくと
院乃法のはゆかりやさわしかバ宮も源もさやう
なしそ法ある給へさ統も法なくれおとし
め給もくるしかぬなりそや　柏木のさやうにおなし
めて本のおもひろとや
まかりはいひくしらへなむ　箋　柏木れんや　細　柏木也

まことハさもあるまし　案　小侍従か返り事ハ同し紙に柏木の詞也

世またなれ清なさ事をも見たてまつれ給へつる人まのもとに

も侍らすおやしき　案　源氏ハ天下無双(ブサウ)のやうなる人

なり見たてまつる女三宮ハ就中しき刹(セ)もう

又を見たまはんとのことなくハあすれとも也

こまやかなる(刮)にうまつりとよめ給ふ(モサイ)虚をとて遠を嫌ふ心ある姿を

たまはれをもうとうちとめてはしんせしまんとハ清しくれ

こひるあめなりかたく一こと柏しくまさとしえへもと

もろきハ　案　これを見なとれ君あくらきたまへるきくこ

見あれもとく侍らんハ卑下(ヒゲ)しかるや

　柏木(ユキ)事ありおりまてうちとつ

あるへくはれ清きの中つまてにうきあらん　案　それ柏木まま

でれ女三宮の清純なるあるはしきれ也

神仏をもうらみまつりや汝をは法とあるハさうへせみいしさち

かたとをしつへの給へと　案　神仏御みをもやられ事やも

さのミ罪ふかきたなる事ありしさとや

ちらしてそいとあるましきことにいひなしてれとも

　案　小侍従か詞也

柏木なからぬかうの人ハひとのかくまりしのみてくつまんしを

なまひの給ふと　細　小侍従也人のうちよ見えし自(ジ)然おしさ

　ことの出きぬるや也

えいちのひち(セイ)そく　案　柏木よりひまをあるらんやえ辞退(ジタイ)

せぬや　河　辞(イナフ)　遊仙窟(ユウセンクツ)

ましさとめ人さらさまわしくえきもちり給らん

　案　小侍従か詞也

院の御かしこまりさぬ程を汝性のかくるとに人おほくはかる

ひくたましゐはさるへき人の魂にもまかへあへしやと思給
るも　栄　源の二条院へわたり給時も女三宮は法ありかり
りんのたはさとの小侍従か心也
わかれかたはひとゝせに給ふるへからんとおもひつ　弄　小侍
従か給ちとゆるしぬる性(しやう)女房のとめあしきこと也
参りぬ　栄　小侍従女三宮へうちなる也
わかくと見えに　細　柏木也
せめしきこえてけるへきわきとうらひつけてやうると
しおきたまり　栄　こうしてはうき給まるかも柏木も
見えに小侍従を催促し給也
よろひなるはいとしく思ひたえ恋のひくわりぬ　栄　柏木
乃故也なりしやん小侍従りまする文をこせうもとも
いちとのん也　弄　よろこひく給也つとうみ祠とおほし

まことにわか心ながらもいとをこかましかりぬるなれは　細　柏木の詞也
世ちかく中くさらにうちかてことしもまさらんこさちとましては
さひもとよらは　栄　柏木も心也女三宮をわらうさきまく
おもひわかてきこともまうてきこえもよろしはとも也
身をいとほのかに給そのはさしかりもを見奉りし表紙の
あやすまくもたとひ出して参り給はる宿縁をとおもしめる
く見奉りし紙も宮のしたしまそてはひとゝろも宮もれ給
ありなとはもやかても給まかや申しさるかそおほひなる
栄
鞠の時見そめまゐらしる也
四月十日(十十日)あまりになりりまそ宮よりとて
御禊(ゴケイ)毎年かる也そは四月中の午日也御もとの　栄　斎院の
こされたもたされは女房十二人まゐらせらるゝ也そし
さらて東院へ給へる時の御禊は吉日をえらひて

よう宮日なし毎年此みそきありけるへし　於此斎院女
三宮へもちかきさ使あるへなるへし
みそき行ともとて　細　斎内親王の禊のことや
東院りなり給女房十二人　宋　誰ともなし女三宮より
斎院の賀茂へうつり行われの汰合力に女房まいるや
女三宮りまゐらしさへきや
ちかきにちりてみそおもくぬわりまへゆるへきとをのうち
し物ぬひをさうるさして　物刀んとにひまうく所を
ちうきくたいとも皆なけかく法衣むくさ志めやうにくへし
きうらぬおりたるを帯りちかく衣のうぬ　弁　物ぬひなど
もうたりあへて　細　わしへ下はんへなれをえつくも
かくいとあさゆうや
いをちれ気もとんくまゐ　弁　女三宮方ふちかくさ

わとぬ女房や
源中将せめてよひつきをたれハ　宋　誰ともなし　桜
京使気をたくあらぬへや　細　おもちれ気のさひ人也
わりともるまにさて此侍従のちかく参ちかう娘たり
帯りし紀おりとさく中さうはちやられさんうしぬすその
宋　おもちれ気法かを立出ある同すや
わましのことしにもへなりつ　宋　柏木をと忍なるや
さまてともわるへきるすりや八宮を所んとちかくおほと
のちかるにある紙ちかくおとこ乃をちひ乃もれて
細　撫侍従乃禰や又ハ柏木のんや是侍従とのひかしのり
しとや　宋　女三宮なとへりやうなちかくやまへんと
うと柏木此之子ならや
院のおりかるやを申しるに　宋　女三宮ハ源氏乃わかるを

給ふと云也
うちしこまりとゝまるましきなんきこえて　案　柏木わりなきん
ありし給さ侍也
ゆくのこゝろはいつもおもひかへすなるたかまねおそりすくとせめ
てみんかき給へはあるぬ人なりのと　案　猶寝不安とた
りしとみへしたり　河　床のさかさ三尺鬼氣の及はさる
や　見在性抄
あやしのことさへにぬるいくとなけてゆるやかさまほし
くむくつけくありてんめをさちくとはつらきこと
侍きてまつるとなしかうて給はさ侍れ此やうり侍
せしとたかまてもおほし給はぬなしさいと心ならう
なまきたなり　案　柏木女三宮のさしこゝろと給はぬことを
とをとやなるとや

殺たちねといひとかくしてもおほしめさるへきなとは世にまよ
給へし遺恨なるん　案　柏木の詞也是程まて我本ゆる
をおもふさまありけれ給はんとは志しさまなりしとや
細　柏木此詞
むかしよりおほきさきたれんの御事をとふらへるにこめてやと
侍るましきのうちよくしもとさぬ心ありけるを
中くましき世也をとこさめしめされすもとこ
られくれてたれまて思の給はせりけるにゐのこをとう
きそめ給ふく　案　女三宮の心をさとよるを一向ものひ
やまんを中くまもらしゐやなりしま菩薩になりそ
思ひとまりてうきをもすれてかの給はりしとや
あれ殺たちぬひとまりたく人よりもあはれにこそしともすく
ありし給ぬるかし　案　源よりは我ころすしは捨ゐるを

柏木のなきにつけてもあはれしく思ひ給ひぬるとや
うらみし御心をもおぼしいでゝひたすらにすてはてず思しける人の
せしと　花　是時柏木右衛門督くるしと思ひしとの心也
いかなるまじき御事あるにも年月をかぞへつゝわらはしく
色に出しつべき色なく思ひなげくにつけてもあはれなる
まかるに　花　何とし給ふことにて思ひとまりて　女三の宮
も柏木の心ざしはいとあはれなることゝや　河　深江（ヒン）　日本紀
せさせてかくおぼしをすてはてたまはんとも思ひつめるも
みづからいとしひがたくもつらくなりしかば　花　柏木の思ひを
我心を制（セイ）しかねけるとや　細同
はこなの心もあさましく思しかなとのたまひてゆくに　花　是
よりにこそ曝（ギャク）はあらじとや　細　実（ジツ）なるすへはやさしとや
弄同

此人姫宮をば思すことにいとめでたくさぶらふとて
露いくへもし給ひは　花　女三宮の心也　柏木なりとおもふ
心とや
いとまとおもはれと　花　柏木の心也
世にはまめしくなれこともたし給ふかなとおもひまどへる
きはんかたへおもひいとおもひまどひて　花　柏木の詞也
ゆくへとさする心をつきたまへぬ何の道心やとの給ふを見
そのほどをなげき給ひてなんとよろづに思ひ給ふ
花　さやうにあまりにほれまさりて心さへたゞ思ひまさる
に我（ワガ）心にまかせんと女三宮をなきものにおもひし給ふ也
細　かゝる事とおぼしなげく心也　弄同
よその思ひやりはいかゞと御物語もなげきのほどをかへつ
うしろめたくまたく給ひてよろづの事を思ひつゞけるかな

おもふ事ありて 花 柏木の心にをもふなり 細 ようつき
なくさやうにあるへしと並てをもひしまいらすると也
聞 柏木の前に今ふそなきしと思ひし也女三宮にあはれし
なりしまいらんほとをきこしめしらんとをきこしえたらはれ
よりてそなくおほすゝるをしるを柏ふしかなくなりしを
中入なしたる中ゆくあひなきゝん事ともまいて八也とけり
しらぬとの程併ハそれほとまいてもいつうしき程に
をまいらせ給へる前に柏木のおもひしつゝ実の事と
まいて八あつしとの心をうちきてとハよしたる女三宮にハ
いくつもはまきなきてもとるとまにうきて我をもよ
なれやうに跡をもんりとまいてをもひみるをくやしや
うきをつも女三宮の方さに海の事をたれよりてや
ゆくうちへしことをちハなくてやとなんと柏木ひしかと

いとさえうるをきこうゆくなめそおもしてまいらし
なにうそをもれやなくとの三巧とも給は事をもひ乃何そ
りゆうしく和傳ゆるとそくりかをも給ハ治りある事
しくかもひとつむるんともうきてかけくしき
河 んたる見んもの給まくをもうしらぬあると同るのやもを
たちひあるかまやとく
そらくをみてうくしなりてわうあらもみれある事あり
聞 らくかとなをよてゆきなやとまいてをひらくよしと
葉末をも二条后をたひなまいて行を伊勢物語に見えし
なりそんをなくへぬなへら四うや 細 伊勢物語白
むら何そめへのとひし時とよめるんもいるへし 哥同
なくいさしうさとろむともたれ見えり 河 睡 遊仙窟
これて寄せし程にのいとらうなき人にうちなまいてさる

ねをはなちやりたまはんとてかへりみさせたまへるを御覧しきこと
行しにたまはんとて御ほとにおとろきてつら見やる
あらんと云に宮はとかさまくらけくとも御覧じ行て
ねこもむつかりて　聞　柏木此君中に猫かなしくて来
るを女三宮ねこしやと云事を行とて在らしたまん
とは云かそられとてはうらみ見んとはみなる人さまかもとうひ
もあるかは君そさめしや　此君引の懐姫のするしや
花　ねこをかしし猫を宮よりたまはんと見よしはあるなかちへる
心ま乃のあるるを得しにたまはつらんと云か心を六条院乃
はとらめをと云て後悔まへることの見えしやとて
聞　君中此心や見よりかへしたまはんと云は又ほそくはうとを
よもとおしてあるんや　とて　細　懐姫のこと也　君中此也
かゝる見えと云てみそとめをとおしてあるんや

二　行ほしかねつる　聞　女三宮かくれ行てほのかにくとも
行さるさ後とて行
行かくのうきなきをとくせの行さうしけりあるをおもいかし
たまをとこひしかるうしも　細　柏木此中納言　聞同
うつしゑにはしきてあらんおほしける此おほしたるらしに
これ乃ほきを移しのつけをさしあらし父のゆりをもとむし
おもはるゝ　聞　柏木此こゝろのふかくいひなし也
まはさりてあるをかんまと口おしき契りのかすならぬ
あはり　聞　女三宮乃心也ほくもうたて契り此まてまと行
うきをおほしめしとる也
懐あもこゝろさしいくてみえ見くたまはんとうおしきを心あら
ろてことおもふ君にたまふ絵を　聞　女三宮の心也源氏
もさこそ移りてえ見え集しきしとの心也

いとかうしもなく侍るまてと見んおもほえて　栄　柏木也
人の御ことをきこえんのみ御心ハいとゝ露霜さへのをきける御
事ゆくへもしらぬなりにけるにこそ哀ぬへくなりけり
河　下官乃将衣袖与娘子拭涙　遊仙窟
ゆくゑしらぬ人をしのひつゝ見えて中の衣も行人ハ　細　柏木の行
末をしらさりしことを思ふにつけても流てときを思き
うき給へとなみたつひにけるかなしきも　栄　女三宮ハ我をよ
そに行人ともなりてうらみんとかくれんや
うち給へまゝ見てものにけるれに出るまゝいたはしハなそく
ハむくつけなくてこそありつゐぬれはさくはやうハおしはしき
いとうし思ひ出てそ　栄　女三宮ハんやなそくハおもふ
しるへき御ことめありや
さるゝにあるかひかりさうしうりや見えなしたまそぬ

抄
柏木給ふくうきこと行まとさうやとや也　栄　又やう
まほしくたゝ折りつゝハはいしなくれハ思ふやうになりにしぬ
あとなれともわかみをとゝうしにおもさんとてこゝろなき
わかしやさうてやうや
河古
夏虫のあとをこそうしに思ともひとつ思ふひをまかりて也なう
いとまてかくれたまひてそてなかくまてても侍遣　細　わか
侍遣なくかしきさう命をおもくうきくへなきとも
栄
女三宮とこひまかりんのまとてうれそれをあとを世
そハ御遣とも
あわひまくたるも侍さんをわすれんくるまん　細　君のことをと
さり　弄　同　抄　おもしてこ細也
侍母くゝも流んゆゑし給さ度あしハうまへれ久ハ侍るはく
ともなて侍なまし申てくきつなまでいうされあれそてハらう

ゆきつるそと　栄　女三宮乃御方なりともみかと見給て
ときはの色なるもの心のちをわかくしとや
あそばれ御おほさるゝもとれきの扉風をうちひろけて
をさなくほのきこえさせとのゝへのなゝかま
女あきさなりしけれは　栄　女三宮乃御まえにて見え
何とも勝るとや
まことあきられの深き事あるゝへしかのみにかんきよくの心あれ
まくらしをゆきしいふきほけてうらみとつくしまた待心をかへ
し心もちもの御婦まくらしそひの事めてとおほされは哀と
あらなの給ひをきことおほしまさとゆるさを
めくらきとせんくり　　鳴らん　栄　鳴く
いとあつくきまさとおほし御猫もいらんとし給へとかな
まくれていとわくしてうきてまたうてあきれ何ま

ゆくにつとおもあそこらしのまて　栄　女三宮の心やすさを
うるしきあつひなまりかまされともつかしく
と給や
けられたるゆめくらきをゆめしきすへてもとかくみつまた
給へいしそ　栄　猫の兄しし言ひ契きしましても
うたれとも　細　猫乃言ひれす
さるとも今打ほしあくまるすも借りすんとその
うすくさてたちいつる　栄　猫の言ひ懐姫るとのことまや
いふ身同
鳴られ　栄　萩まおもう
秋乃字まりとも心はくしあり　細　四月まられたも　栄　秋さ
はくさ物たりうそまりもとや
あきさてゆく字とも志しまた猫鳴くまたいけく風寄乃う深そてまう

柏木衛門督のかくるゝ時にもとつりにくれ露あまれハ是
ほとまりて袖ハにきさあまるそことのんや露れ打もく
をそれゐるハいかれる露をとこめさるらんやけらくもて
ありとハいてまいもちかひあるとや一筋めへ袖ふれん
ともんの字をとらへくかんるへしといふ筋ありく又
清巌(セイガン)の説めて女三宮りあひなまて是とふかまんれ
こられしまはてまちのあらぬが説(ケツ)ふ面白こともや祇公(ギコウ)
師説(シセツ)めて古まり出てまいもちかひるといひきく
まり紀るゆきれてるをとこともあるぬそとや後撰集(ゴセンシウ)
恋部(コヒブ)三四
恋三
涙川なきは猶えをおるものをりて袖りうき家のむすぶかり
恋四
思出(オモヒイデ)て音信(ヲトヅレ)しきん山をこりきんへまことりぬころうみふむなう
てまをもちろりてそ此面きこも世にハなくれとや

露葉(ラウチヤウ)ハいはれる露のかゝりて袖ぬるとや　花此
奇ハてまちをとりかゝるやいはくの文字へをかりて入
るへきやうに　兼　正徹(シヤウテツ)の簡(レウケン)ありとらに此きたうしれんある
ふしうに禅閤(ゼンカウ)いはくをそれあると此ゆまとや又云
如くんと詞をそへて申心得べし此ちれてまをもる
古今にもあはし此末詞とも見えぬやうふかく行る
ことあるもとも帚木(ハヽキギ)まゝにかくしひるんやうてあり
後撰恋(コヒ)三同四此外古今にも見え可勘之(シコ)　細行へき
くるとまへくをとや説は花ある説ハ行くれをそへて
らのとかをかりて入るへしとや又正徹説この時柏
木ハと心とたりちらの事あれもてまをされ古今(コベツ)
をとおまよとや袖あまり事もとにかとも有とやされと
此歌あまたゆり後撰恋二に見えこ此外此歌あまた

宿へしる霊り夜ハさうえ見

むかしいてうまへ内裏ハいそぢんとあるにさらく

なくさめ給て　花　柏木れ出仕されぬ衛門ハ年よ

の地あるへし

出なんとあるに　花　柏木の君と女三宮れなくさ

め給とや

ゆかれの空にうか君ハ清らなる麗容まうかひとみてもゆかしく

花　女三宮の尼宮を我君ハよそにても夢をとくや

この事をさらさんとおほしめたるにや　細　薫の君

柏木の給ハれしをと柏木れ出仕給たるなるさま

てうくいす給ふなかれ

むかしれをとの給ふにのかくれ枕し事なるをとそ

さすやうかく心そぬる世しかもかなとに有をとらあれ

てるまりぬる心ちして

右　かしはぎの袖の中すや入るそん我さまうしぬるも心ちもちろ

細　織の字 縫縷じあつけし袖の中にやとりたらんの事

女宮れ清まゐらせもあらて給ひて大度つきて出ひきあかし

しぬるうちにしきれとめともあらは　花　女二宮家女の

るすや太度つともこ文なとに内侍人やうた給とや

弁　一条宮落葉れす見へさ入給ひて文なとされまさん

給ひなさるへしとて　細　落葉の宮也

見つる夜れ清らかにありんるもさきと清人もあり

花　猫とれるすや此猫の始末蝶のんとも清くハ猿姫とも給

いんらと思ふろも　猫同

あれ猫とのありしさ夜つとことなれとむしいてらく

をいそしさあやまちしつるそうれなにあらんことそ

まうてゆくあまりぬれとおそろしきを 孟 女三宮の事そこはかと
の時の御事なれハ恐しくおもひ給ひとやうりきや
宮たちうしき心ちしてあやしき事ともし給ふはかの女の流
ともあはさしたるをいふにはかの心ちあしといふあるまし給ひと
たかひにたかひにとむつましくおほゆるまゝハうひのまくらとえ
ましきれあるは 宮たちうし 花 宮おそろしさにや
源氏の流めはとりあやまちてそとのやうしけるんは
うそうるまとおほしんおもとゆくへハあれやうつしまなりしん
孟 后なるとにおはしまりてつきにあらしんまそれハ竜顔(カクゴ)の
前とおもひくもれていたまへんとくるしくハお
ましとそやそそく源はめをそそめしましやさんうて
つうしきやうや 河 妃(ミツ) 日本紀 御妻 周礼(ニユウライ)
しるしうるよおほしまし 細

さうらちさうまは源氏あそひけるをとも 弄 女院なるを
宮おはしまりてつうにあるやうならぬやうなとも也
こ乃院なり 細 源也
めをそそめしまとなりくんなりへつとおもそうくきうし
宮おほしめさるのそそめしまれ 弄 上陽人あもひいかう
源氏の女とさしゆましとつうしまつうきつあめる心そくま
しるを 花 二条后なるとの事(ハイ)也 細 世の人をもいふ也
うちハゆへありとめやうしうやもとたておぬきそのへそうひさ
あらきやあるすらう源氏とにうちるかひとさなりうつ
そうひとおほしたれ 細 世するれなるへきそうへを宮烈婦(ニツハウ)そ
下にはのもとくへあるや 花 うへそゆへくしきた
やうそうるころのあふもとさくうらは悪しとるとおもうや
れんゑもおほしとこ 孟 女御更衣(カウイ)なる位(クラヰ)の人をあふく

とくに思ひしみたる人あるまじき心ばへなる御やうを
思ひとりて後もこれ下れんの中よりあはれ御かくこ
そとらくもなかひかりひかりし文をあつとをあ
つき文よりて思ひ出るにをもつ給ふれとや
これは御かれころをあはれと思さ給ふにまのお
ちし給ひつる御心かたしにしとも人の心中すつき御らん
やうにまうけて見しを思はさるれはあつたることよ
きこえたまひて給へは　弄　女三宮は御心ころをと
ききとや　細　花は見しくをかかさ法心をたかへぬとや
案　女三宮は世にすくれ人のまことは御心ははか
くらふる給へや御身一つにおきかへしてむすれとにに
たく深き志しまゐらすと思そみし心を給へる
ひきとや

いとけなくさまあしく御らんせしを思しよりたまへり
案　女三宮の御心をいふ也
思ひ申しきこえたまへるとあり　これは　案　女三宮の御心をいへり
おとし思の給へるゆへに法なきをおもひしり侍るまゝに猶そ
思ひて文のかよひとおとろへを給へくはかりそこそこなと
らうたしきを思ふにつけても見え給はてさてもあらてはいと
あはれにてさやうにかくもえ見んあまたを思ひやり給はぬを　案　紫上
の御かはり女三宮はたゞ御ことをさらにちらさく人あるとや
紫上の御病まうちちさく人あるなり
御心しらせかはりそてしさまをあらためて御ねんころなるやといひと
なくて　案　二条院には源の氏御覧になくおほさるまし
てうとくしさをとらすあかぬくまゝ思ひ給ふとや
彼院にこそみれなさるとおもひ給て　案　紫上の御かたのやうを

うらみ給也
今まのきはにてもあれとはかなるまゝかくさまを
見んと思ひしそ心をまどはし侍りとまかりありかひ
そめて見んと思はれちりなるまれは　㝡　是も此御方の一たるまゝ
是は源氏の事を思ふにまかりて見んとしと也
うら見てろ給ふを恋しぬはきまとくしはかなくて
とのつゝ此御ことも我はこれよしそてんするとぞかゝる給
㝡　女三宮へ也おほしめしとも思されとそのつら此御方とは宗
上此御聞と源の女三宮へ給はる宗ニ御給はし
たまはさんとや
御心とをしきとも思ふ給はぬとしとおはしくおそくおはしくお
おさまりて宮は人しまた浅くまじくおほさる
㝡　源の御と柏木此家をも参給はぬの女三宮の御前にも

とおはしく文なとのるしとさとも也
かむの君は思ふしかゝまる心ちのこまさらそておさ
めしまつらくのかむの君　細　柏木也
㝡　めおくりてひ給ふかゝ也
まつり此日にさゝ御見すかくそひゆく君達かよろこひれ
きそひそのとなる御まいりて御わたりてかゝめ
めし給へり　㝡　是此君をとしのそれかとなも大方の御
し給ひて出給ぬとも此祭は賀茂のまつり也四月中の酉
此酉乃日也酉ニ河社を始とを用也禊して御まゝ祭と
もなとさくそ御祭とまうつる賀茂たるへし
細　酉此日也
女宮をさうしくまつさたるさ有りきてものを
ておさへうちなかめてもみとすひ給へは　女宮　細

葉守なり我身ハもとよりたゞならぬと云ふなる所也

地 よそめながらのうしろめたくやかくれし給ふ上臈の宮さ

もたれしあはれさ

我かくれしそれ迄のそのうき涙にくれしはかなきあはれさ

なれにしかひの袖なるあはひと見え給へ　シテ 柏木の宮

ふかくたのめし給ひしはかなき契を見えしとや

ちやしばしきよしとも思ひし葉守の神の宿ならしなくね

シテ 柏木にて橘と羅とゝふて御園も羅とこそにも

源氏とも神まちとゝ日毎の恨みかたしにてもとのかほかたと

紅梅（コウバイ）し給ふと云ふ　細 橘さつきとよもすゞしや

ワキ 神の代ゆかしきかしなしぬ人も移るし所かな也

也思ふもいと申くたより世中ゆかしぬ東のをとゝ

とくよりそれとも云ふて人也りなしぬ涙まじくにたゞし

かくあはれとよひとゝ申くや　シテ 今ハかくしね

しばしや 車の音　シテ 世上の人ハ象の物見ゆかしく車

のきしきれさえかし袖もよそに宮様くつまくちなり

柏木の宮也

女宮ともかくの御迎のもとりまししなにさとも見えましき

それなるよと思ふ所の心とあふり見えめましき

またの物かしこそ物語さまで　ワキ 女二の宮の柏木の

むかしの心を我思ひしかなねぬと物語ありけるに

シテ 女二宮も柏木の女三の宮も宮姫とハ名給ひしと云

またハおりひらりしハ御らん給ふとやそれゆへ名を

落葉の宮とおほえし給ひくの申見るかなたるに

女房あまた物見るみすのそとに人々もなくあはれのやかまれそ

うちながめて涙うかれさとなかしくやむさきさる事

てかゝる御なからひもさしはなれておはしまさしとおもひしかれ
と思ふにしも今ハ何ひとつとしてかへりみさせぬさまもくやしき
まし給ふ心也 案 柏木の心也 抄 此段ハ女二宮の御ゆかり
あまりえんなるにかくなにとなくかなしくおほされとおほえしく
是今一きはとハ女三宮をかすまへり見めともかくさせう
無念なりし也
もろかつら落葉をなにゝひろひけん名はむつましきかさしなれと
弄 葵桂のかつら也 落葉とハ二宮をよめり 細 葵ハ女
を云り女三宮と落葉とて見すてられたる也これより
落葉宮とハ云り 案 柏木もろかつらと云て葵を桂
の枝にそへたると云り 落葉とハよろつかくの落
葉なるへしとらくらん 勝と云心も名はむつましき
かさし也 女二女三ハ連枝といふ心也

とりなしさまをおもひ給ふ 案 柏木此歌を云てあしく思ふ也
いとあやしきれるまうことありし 案 柏木の心也しる
うちすさひたるをとも也 弄 二宮をわりひおもしろけれ
と云り 細 弟子地也
おとゝの君ハよしたしくなるまて行てきこえさせたまへり
待つる君ハいかゝおもひなすらん 案 源氏の御事ハ二条院なり
あつしきてわさと八六条院へ渡りおはしましたる女三宮もゆ
かしく思ひとなんおもひ二条院へハたちかへり給ふなり
ようきこしめすまし おほしさらむこと也
まこと入給ぬとて人まゐりされきこえはなれたるをおほしま
かせ給ふへきにもあらて御心ならぬさまにのみ御こゝろもとなき
なり 案 是上の御もと入と告来也
きたの院ハ御ともさすかにちかくまうてさせ給ひぬへきのみ

ゆふちかすみのこゝろなるらひ　栄　二条院のみかとや　河　路　出路

日本紀　大路　百十九

ひとまろくしうら秋かぜをあらして[illegible]　河　狂言　万葉

牟　曲也まつまつり也

日ころ[illegible]行つゝをみるに[illegible]

ま[illegible]八幾[illegible]

と[illegible]　栄　女房達

ゆふ網也

信[illegible]

[illegible]

ま[illegible]　栄　可能便達ハまづ退出をぬ也

[illegible]

[illegible]

さも行[illegible]

細　あく[illegible]心をおぼ給也

[illegible]

め給へ　栄　[illegible]宅葉[illegible]也

[illegible]日数を[illegible]

給へ[illegible]

[illegible]院[illegible]

せ給へ　栄　不動明王如此誓願也　正報盡者能延六月任此

日数を[illegible]　又大般若経云　宅葉亦能延（涅槃経一）

将をうさう[illegible]命と[illegible]桐壺乃文也　又将を輕吏

河　大般若経曰　宅葉亦能将（涅槃経一）

金剛手光明灌頂経曰　世号不動立印軌儀次観自在身成

就尊形状百由旬内所有難調御鬼神取持者皆悉已散

壊又正報尽者能延六月 住不動儀軌云 弁善無畏三藏
之師欲滅弟子爲受灌頂善無畏行此法悉受灌頂其
後得延年之事在之云々 細 定業亦已轉乃ん也 見河海
いとあへなくうせなんとするにえ見たてまつりに尊像
まれゆしをうれしきをとおぼしさるゝ 宋 源乃六
条院ありあまりしは聞りうやうゐ如給へも限をえ見給
ざねとも
まり給へきにをはりぬと見たまふ心ちことをしもなくに
成しき給んのうちを給も見たまり給あや月ごろはにあ
らそれ心そこぬものくをちいさ給ことにうけりてこうひの
しるかとにやうくうきい心て給かにうまつくをゆくしくを
おぼしさたん給 宋 源を存命有てくれとや
ひきしをてうせしまて 宋 物気乃祈加持せしまて云詞也

人ハみな出りぬ院ひと不の出りくに中さん 宋 源一流乃ハ
耳ニはやさんとやこれも流息流の意也
事とのまことと月ごろ
とのまことを年月比てうしをむさまを給うあさまれく侍しを
まことおぼしきハおぼしきしきんと打ちひつまとと
宋 物気の詞也源をとは息不れ怨給詞也おぼしきしきん
と八世をとるさこうさんとさふとや
さもくたいのちをもとうまつしくあとくへ給くおぼしま
かとりんまれも 宋 源乃一股あ給くてまとくかう命もとへ
うるたをりに給ひ給をと霊乃如まは給をうにちひゆる
もとや
いぬくそうしく心ことあをとうきされつあし人の心れのこりてこ
そ 宋 流息不のあさまでいまくしき業人あれとも源氏よ
は执心のころ氏のこれハ源あしこれとハ出えぬとや

かくまてさかしきこゝろ添たれハ物のこゝろしらぬさまとこそ見ん
まくらさてはかたにあらぬ事なり　案　霊(りやう)ありて彼とも紙
なるを
けしからぬ猶しとこそおもひはるゝ物をとてうらうらとみゆるも
あやしうむかひ　案　是ハあやしけれ也さるかはなしさとも
たゞ世のつねの物のけとはかはることを見るはいかさまにもと
むくつけしと　細　葵上ハ此時出しものゝけのさま也
おほしよるに我とのかたちを見しきまゝはゆゝしくなれハ　案　物気のお
もひよる事あるゆへに葵上の時もかくゆかしきとや
はなしハのまことにしへて見きよ人の事ちかしくおほえさきを
引に　案　源のまゝ此のさまをとらへ給也
まことにそれもかくのこゝろよみさるとのたまへる物のさまかれた
るに　案　生霊(れんじつ)の御息所の霊(りやう)なりし又物もとりて見ゆる

ことゝ源のおもひ給ふとや　河　誹名
きこえ人のおもてをみきゝすることもいひつるもあるまゝとたし
かれるかのやうせよ　案　云へりいひおもきてそれ人のおもて
をきかすることは息所もまうさしぞ常にあるさまなれ
たゞおもしくにきのまゝとの給也
又人のおもしくけしんをかれんなれすくおもひしそうましめへからん
とゆへさそてちかんかくなくもきゝんをしへきことの給へる
案　御息所と源との間かくくのおもしぬるとかくそかゝるおほ
て給(れい)もへきとや
おろくとりてもたすなく　案　ものゝきゝれらさきとや
我身こそあしくゝきさ侍なれこそかくしもかくおほせとさまくしも
案　御息所我身とハ物気の身とかへりあしぬほかしとかへり
ありおもころしき妄執(まうしう)のことやきなれとのんとやきおもきこえ

し給へるも源氏ハ源氏乃君也といへりそれなりけるよ
ハ源氏ハ其人をと云也 弄 それなりけりとハ源氏君と思ひ給
へきと也云々 細 物の気の事也かりにあらはれて生きとハいへされとも也
いとはかなくとなすれさせ給ふ物しくさすゐものちらしたる
ありひかりけれ 弄 草葉ならぬ物の気ちらしたるなとあり
なかくいとうとましきやうたまれハ 栄 源氏のこゝろ也
ものゝけをしをおもひ給 細 源乃物をといひたまひしと思給也
中宮乃御かたにもいとうるはしきをおもはしとおもんおま
きなりてもなんなれと 細 物の気のいふ也 栄 桃花中宮乃御
うへとの給へり源の辺(ミヤスンコロ)ハ思給ふとハいかゝあるとても
御息所のよくにくみ給と也何かうけるかたちある人乃魂(タマシヒ)の在世
ありかたかりけるといへり
こらことにたりぬるハ 栄 生霊(シヤウリヤウ)生活(ゴ)よむかりけるよ也此世乃人

みやくハたすけんや
これら命までもあやふく物しぬるやあらんなと我をうつくしく
しといひけんかなし 栄 物気乃詞也我子れことゝもをちゐやさう(ワスレ)
と也 弄 子れなとゝも云ぬとも也御息所の心也云々と
ん乃あはれなるんとまつ我物なりとある 栄 さうしん
とまりかたき也 河 執(シウ)
それなりにもいひそての世に人よりも物しく云あはれし
もてしなりな也 栄 御息所の在世此時人よりもなと
云給もてしなりもかくとて源の御物語乃つゐてに御
息所乃やうなりといひ出て云それまても云もと深まて
むかしよ人なるとくの給ことともにいひ出く源と心
給なる人しもはふちらとハ御上を源との事をといへり
前まつひみのはあれなるにやしことをいへり

さとちの法師くるもこれはゆくに 細 前の宮人へまうで給し
事也
ふようしきをみてうちし前栽との給ひてまうりしきんいと
ころあしく 弄 宮上とうちうち給しことをいふ
今ハたくなきよりお前しゆるしてあと人のうひおゝしめんと
なとに 孟 其人あられなと何とてゆるしきを給ひぬなとや
それをかくし給へとてまこゝへと 孟 宮とひんのおもひおとりはと
もてなりことをしてうくし給へこにとや 弄 前(ハヂ)のなり
見るも
うちわすれたるにも 孟 浮息沼乃中にあひしにより
てや 細 悪鬼(アツキ)あるにをそれハ暫時(ザンジ)もちかはたのよそに
病者(ビヤウジヤ)乃ためにとのほうあかへあるとや
めぐみしきこれをそひかれそめくところをみたまり

おそろしき罪業(サイゴウ)乃ありや 弄 悪霊(リヤウ)ともれあらはれるる
やうに 前世なり 孟 来世(ライセ)ふかくおもふと思ふ
とのやうなれともとくしきこれ世なるハうさゆるもと
たまり 弄 あらはしくもあるとや愚妄(グバウ)義(ギ)なり 孔愚(グ)意(モシ)
ちよくいかなるに
このへとあるくみてしめてあひゆるするハあるまじきれと 孟 強(アナガチ)に
宮上のとおくもおえあしまてとや
またのほとりいと法師のうちとまるにゆかしてえちかはき
あるしもて 孟 源氏は法皇に御のよしんとし給へハ弘法の守護(シユゴ)
し給へをえらうきを給うて宮上はまうり給ふとや 弄 細 同
法の気をそれに法のうたあるく給ふ 孟 法皇御乃源氏に付
給ふをいはゞ法のとさへかのうたにまくとや
よし後はこの法のうらむろるされまりさ給せさを給へ

案 此息所はとうろむするなとし給へるなり
まへは心地とのくしからすとも見えなからるしくるしひきされ
の法とのこまつられて出しふかうかりてともさそこねえ
いとうれしくちまん　案 物気乃祈れ法の対ニハ法息所乃方
みえ結句（ケック）くるしきさとも也
中宮かくも心よわきとはさん出え給ふ　案 杜好中宮の事を我（ワガ）
罪（ツミ）れかうこさるまとはさん給へとのことをよ宣はれん也
ゆめ気色はさんへ乃御こたひとさしうひそへむんつひ給ふ
案 努々（ユメユメ）禁中なとへんとおしえひ給ふさ中ましれて比怨
んのこゝると中宮なりの給也
東宮はおはしまし法の心乃此ついとこまむ色うんくらうれ
ことよりのうをせさるを給へいとうゆしきことにならんあり也
るるとかひつくられと　河 古鏡云 書れ東宮斎院也仏経なと

のことつきも給はれと此院あかん仏法をはゐゐ給ふ斎
朝（テウ）乃法会仏うをも給はぬ
おすへしとおもひとていかなくとすれハさるかたにむさて程きのこそうく
花 斎宮寮（レウ）忌（キ）詞（ゴ）内七言（ゴン）　佛　經　塔　寺　香　僧　尼
斎（カタカシキ）　細 斎宮ハ経（キヤウ）仏をてにかゝり給はさる也　炷
物乃気なりむつかしく物怖し給ふらんもさうたうさるれハ
案 源氏乃心也
うんしこめて　案 物の気を封じこむる祈禱（キタウ）されさる也
うへとえ又おもとうしたにものひきうしまり給　案 其上を
別乃所へ引うしやするなり也
かくうを給ひ斎りもいかでと世中またもちて出とかくしなる
宮給へくあるをいとゆゝしくもおほされ　案 其上のこと
て給ことゝもの本すにをしきれハ法をかしひかたさるまも也

なかの人のさ刀をぬきて行よあるをみてちかめるとうへり給ふにみ
ちまたかくへのかやそいひとせしきこえと舟をはかられ
抄 紫宸殿の棄ハ若やうへくさとみるとて行はるる白刃を給ひ
と也 細 紫宸殿棄也
はまろうひあけつるさんなひんの出てうしまへ日ふく
細 かくこれうちのきことぞいひて
雨そぼふるなりきのとうちのきくし行人もあり
伊勢物語云三月乃ほどまで雨そぼふるとあり
前栽ニ露をしたるとも見て衆人あやしきやハまとらしや
ほのもれそう舟とよぶるハ舟とめりそゆる舟也日本紀ニ
柿ハ萬保奈とそ 抄 紫上のひかりとうしなへる日本書ゆそ
そのきたるしにゑふの雨をかりあるすといふへともあると
也 弄同

又かくさりしひぬる人をかあらしはえんあらしぬことや
抄 紫上乃やうにおほいよ哀将なる人ハうそのしきを綴命な
名物とや
なるま紙枝桜りといふあることもはかるそう除人のいとほくに
あらへこゆよのこそれをしいひをはくささく
抄古 ゆそへらしたちくそてしとまうる掏あしハ河をと桜よひきまちし
紫上乃カ上恵法寺比奇れんうやゆへの心也 弄ちるそ
しそのんや
きうれんつるすうかん 抄 紫上のやうなる人乃いりと
こもあかし色そきのしうにのそ除るすあるハそれから
のさもてあらしぬかさそしの人色こころくるすうしん
ありさく乱不定乃世しそこるひしきさんのなくささみ
なかれといふふんやきハ下ミふそ女三宮のことをあらしそく

よハ朝夕乃儀也

今ハ二品乃宮にて 栄 女三宮乃事也 細同

もとのおほえおとろへねハさるへきことなれとかくおはすれなり

はなやかなるをとまらぬちからなくめてたきなり 栄 紫上のかく

おはしますハ女三宮ハ世のおほえまさるとなむおもひたまへし

もてなしハ只おなしさまにてありとさはへしとそいひ給ひて

柏木(ミホン)ハ伊勢(イセイ)のおもしろからんとのたまふ

清水のみやうとくてしたるなとおもひて

栄 柏木ハ明日の賀茂乃祭りゆかしうしゆかしくもなき

うらもしとおもふ也 細 同車(ドウシヤ)してそや

まうて給ふおとうとゝも左大弁(サダイベン)藤宰相桐壺と 栄 葵乃段の

日乃人々を柏木ハ兄弟(キヤウダイ)左大弁(サダイベン)藤(トウ)宰相(サイシヤウ)おなとゝさき

まそてものみんに出給也

わくれにのまへて乃給ふなり 栄 車ハ奥(オク)よ乗(ノル)ハよろしき也

されハ柏木ハ女三宮にちかつきたれハわかくにのまゐるたるへし

かくいひおもふをさへおもむくへしとつれて 細 紫上の悲嘆(ナンスツ)のこと

ともいひおもふ也 栄 柏木ハそこそこての心也

なくにうまい世にハえしらぬへきとうちもらんしひとりをうち

て

栄 柏木ハおもひきるらん也

めつらしくもちるをとめてたまさかにおもはれ奥よりハめてあり

古 ちるまてに桜ハめてたくたゝねにも何かえしらるへき

うれ院へみちのくの給ふしるにまたれハゆかしき

やとり

栄 二条院乃事也

たくひなき院をこひよりかくてかくいのちある紀さと

あつくまつともありあはせとうちまかせ給へり 栄 紫上か

うれ給とハさしあかれとさらしつねハ只上ハ同乃院

まつ人をとふひ行とや　、
式部の宮をまちも行ていつとくおもひしかはまておつさ夜
みくその御所の人々の　細　清見も几帳也
清見かたそこともえす清見行のは　宗　人々とられたる紀さハ
こまて清見かつひの奏聞ちとやも
古郷の光源をとふひてたちかへて行つるに　肖　夕霧此する
なり　宗同
ゆふくゆくしささ西より人のゆつれたまへんしくとたこ
とゆくなんたうさまし清るやともとうきを絡あけさそ
集り清るちとの絡　宗　柏木の詞也何とゆへんいつく
しきゆうに人のゆへ侍しうたと夕霧まちてひ行也
いと打まくるりて月日へ行色々紙此暁よりまちもいつ絡
色々つるをきのきれしわさにちなんあり侍る　宗　夕

夕霧此色紙也
やうくいさ出絡やうしたまつくるのちそいさまのなん沾人々
ろ涙川ゆれとまくいとたの身しきるしやんとゆへしまさこ
とにもそゆそてゆへとにつく分まるる絡へるゆかしきたなり
めともこうしかれたり来たゆはせゆのあやしきこころ分るくひ
あや　宗　夕霧とも此まて此病おとし血まれ忍絡ハぬとや
昔の人の身のゆかれやうや
此忌のいとけしもまてしくぬまつてくれ清るもとつく
ん々め絡つるゆれとめもとくむ　宗　夕霧此まつくれ事
とを也ほとまて歎まとふハもしたまよへるちきさ
んのあるうとゆふ女三宮のりあゆまりゆるん侍るかり
柏木これめをとくめ絡也
ゆくこれ々まちより行るよし　細　涼のまへ絡也

きこしめして　宗　とのゝ来り給ひし源氏こそ給ふ也
おもき病なれハ　祇　源乃詞
女宮にたとひかゝるとき給ひつるを女房たちもえ心もえんお
さめたるをくはしくきこえん宮によろしくきこえの
とゞめらん宗とかくしけきをみてさらん　宗　源氏の御使
かくの御詞也かくおほさぬにいとくちおしきとおもひて
あまりさのみハかくれ給ハぬをひきゝこゆへきと
の給へり　宗　此ほとのこゝろもとなくおもひ給ふのはなれんとて
対面ハし給はぬとや
かむの君ハむつましくて
かく侍りけれとかうかくしハえ来るましくあつかひも
ありしかともんなれハかうて　宗　牢籠せハ人のおとろへも
なやまれぬとも世のかくおとろへ給ふなくハ柏木ハ

下にまつ柏木ハの御事ハえ来るましきよしと
のゝしりまいらせて来るとや　花　牢籠ハおちふれて
おとろきさわかしくや　弄　いみくきおとろくへき也
禅容又云世ノ事不退源氏の御中にしるしき牢籠
はかなきかたにおもひまいらせし又云自然とあらぬかたやまいり
ての時也柏木心に　細　花鳥ハいく只不自由なり
かゝるへしおほえありしとおもふしまいりてかれかされ
さるまて来られとも　祇　ゆへ私也人のおとろへ有ること
さりとて世の中や此後ハらうたるや
ちゝまされなりありかくいさめて給くのくらしさおほえ
しく思ひしあん〳〵いとしきかうとしとはくしてくる
おこあつき給　宗　しろしてこそく柏木の心ひとる也
よし人かくさよにむつきうるましくの御事きこえひのまいりてよ

かくろあやしきまの夜まゐり給つらんとも聞やうにいとふまれハ 細 源の名
此息不ハうての時ニ気のとりてありしも 余 此息不ハうての時ニおそれ
しらましくとやましてせうりきゆく未世あらくいるると
くあさましき業障ふきつむ人なすれハ除冷しき
ふとおはしゆるとれ源乃心も生とのいき
中宮もとあつらひ宮の給さんそこれ持りへまのうく
余 生との枝好乃中宮もとらへあいりひ給しふ手曲とも
く宮るとも生給へも此打ハあひそうしともすれるすと
の生れんや
いひまてゆきハ女れ身をこれおもしけこあられまとあそ
うしや 余 我も人も同罪ありれ物ハ女そともや清息不めも生
ふとも同前とや 細 女ハ業障ありしとや 河 涅槃経云
一眼有三千界 男子結煩悩 合集為二一人一

女人為業障 女人地獄使 能断仏種子
外面似菩薩 内心如夜叉
あつくれ世中いとはしく 余 女の身れあさましくれそ若き
故命し給ともせ中ハいとをしきまへく生とれんや
彼又人もあうかりし世中れもつものくるよにいて給へりし
こととひいてをりしにまとくおはしゝるにいとくしよ
をわほさる 余 まくつまうひるの物語り清息はのるすとの
給しまをとと物気乃いひ出すもにやくハ微の清息
所のまとハ知給とも又まにいまくはなりしきつと
をおはしめきとや
清息しおもうしてんとせちまおもいしられそいむとのちらく
まやとて清いてうれまるしそうりえ給ひて
乃ちきれうしたるての給へハ清うそいむとれ 余 生との出家 力なき

やらてゐるしたるも清くしとんさむもこれさいのち
うひたる人し
ゐのちろりとうきさきを守り給清くいのしいむことのをく
まてるうしほとをすりやもそろもあゆれはゑさうさ允こと
まうまく ゐのいは 筆 殺生偸盗邪婬妄語飲酒也
人はろく清くろうに何ひゐるく来るさとしのうひつ卿
ともろ心を持んし字を給 筆 源氏の作者也紫式部也
さゆうくうく世にある人ものとうく清んさうふとと
あさるまでみえしつめ行らぬほどさるやう此打るかさと
しくくる藤紙をくひくを一めまのんとのあさるるすい
しるけくにほまてしてきまて法花色もてしおとも
中を給ふさる者 筆 源氏をんと云行め給ぬとも
ゐ月なるもいまもしてたれくしくゝぬそ此久しきまさえき

そゆき給ゆ御とおもしてうとはもとくしたるつしきはうな
つきされとたるはとまさしにるやましらう給きのくをれは
さくまへさわさ月ことに法花経一部つくさをゝ清めくろみ給
行くれとゑうとれゑさせさを給ふ 筆 五月なるとは蔵武
の年ゆましさ法者れと薪さりはしそうろうしは允清く
とくや
清親うこちくてを宿さんの清を給しみさらとはなくさきと
してよすをも行 哥 紫式の枕より此ほとるる也
あくられそめて見れらくられしきたるをとくあるとあて
清くゐ此物のをさりきてはは 筆 まのくきれるや
いとくあつき給ひさも給つゆよくのさうちき行人とい
さんくるる人あほしなけきたり 筆 六月の時分なれは
まれやうなる清くもちゆもうも経清へてきんくるしく

見まゐらせ給はく世中はなくなりなんとわりなくあさましくおほし
にけしきことのほかなましくれどかくおほしまつふあるなり
むらさきし見まゐらせんに 細 紫上ハ猶もおほしぬらるなるなも
源の内侍をさとりし給をくれしくこたへ給也 孟 紫上云 十九
西御方御病中なるも源あまり歎給を見給ひても しか
こひのくれことも世はなくなれとも心すくなりけらん
ま源の歎給ふもところなれなしとてかとんへといふなる
給て源ゆるゆると来るなるべし
いと思くはなるる人なれはこひわたりし女源内なとひさく
うきまる事なりや六月はなりてそ時く源ほしまみをたもち給ひ
きるめしく見まゐらせ給なる 孟 こひくまなるべきなれ
孟 源のわかひなくらんとも也
たらとのとゆくしまて 弄 あやうし 世れんや

六条院ゆるゆるもえまうで給はん 孟 女三宮へ
源氏ハ二条院にて也 弄 此事乃間ハ紫上ハ病を勤夫
つとめ時はこちらへ給也
姫宮ハあやしきまでもおほし なやましうやみ
まいのさかりにも おほえなやましく給へと
孟 女三宮ハ柏木にあひ給てより心乃内をうちとけ
懐姫也ことなる人 細 同
おどろおどろしくなくてもあらても 孟 なやみに給へとこともなく
くるしきとや
三ちめる月より也猶こそしめさせてくるしきほどこそある
くまし給ふ 孟 喜服乃事とや女三宮内乃かれこれのあり
やまと宮さのへたるさかりといふなり
彼人もまゐられく 細 柏木也

おもひあまる時〳〵はさやうに見ゆまゝうれしとてあはつきせしに
あかなれ事まのかうしくはらり　箋　一宮の縁も又女三宮は
あひ給と見ゆる所也　弄　柏木女三宮事又思ひくら
しほと有へし
院をいかしきも御ちかくしき給つる時四は　箋　女三宮に源氏
すゝしまいらせ給とや
宮たちを人の間をもひとしく心にやはある　拾　源と
柏木をとふひ給ふ人行女三の心　箋　源は皮給りんと
みゝもたまはれぬ也
いとくしめかさ給さされよ世間をもの人あみつそ
あつく思ふ人のみ心なるとあらそでめてらるれ　箋　柏木ながらも也
末　かゝる思ひたまふ侍る(参じ)との女三宮の心也
おほかたうち思ふさまにはひたなき院の御身に給はるもんはぬ

かうはちめでためさまにし給のを見給ふ程なり　細　源は
ゆるされぬ事をもなまし給めかしけしおもかくいて世を見るに
箋　女三宮いとよなき院よりまへく給ふ源の御心もちく
そひ給ふへし柏木は世のさりとも仰をめでまし〳〵給はん
まする事や
かくるやうにてるを給はかりかれたまふ所をくせまるそ有事ある
細　女三宮懐姫のくせ也　箋　源はおもふきも行人と柏木を清
らんして懐姫あるもの織まる給なるをくせとも也
清めれとたちかへりまちるめて　細　懐姫をと不審とあるも
箋　女三宮の院懐姫をと見えとのめてあやうき院にもちたなるに
源のうとくしきなくてあゝしくたちつゞゆくとも也
弄　懐姫を穢也
院はいくしきを給ひとも思ひてとはまさりくたなるをそとは御やさう

らうたけなる虫の中に鈴と云こゑゆかし、なにそ　弄　女三宮乃
懐姫此るゆゑつらきいかさ慢(ミツ)なとして勿(モツ)體なきと不審(シン)
なる也とそ　抄　弄説如何つらかさ慢しいめ此とそのゑをも
なくもて源のとらふこなるまや　河　諭或囉
なるらし釈　細　六条院へ源氏よりうつとりさせていますこ二
条院乃ことよりようも差枝結の事也　弄同　栄
女三宮姫結とて源二条院すりよ六条院へ渡おはしや
女君は心けくむつましきて渡ありもにまりてもとくしさ
いやかにまそるし御つりの事かくらうちみ事へつきしかそ
そこみをくそへりよと宮まうらうちかくこまうふをもち
もちるていとこよりにゆかしく心しておとこおそろへ
結へ為しも　栄　葉に清急しもまりや
さつまをとに志たらくはくしきにもれ角るやくまこゆらは

きよらなる人にまたくらからぬを尽たまも　栄　あまりなる
こゑ／＼あはれく見え給ふを云り
河万　人の心のさくにかなる声のあはれかひらあはのすかの遊(カイ)をさしとりとふ
弄　さま／＼まても一ふかり白きに極てきこえさや云と
ものゝわたるる虫のいみを此やうにまさりいたくにあはれ　栄　けにこそ人あたら(ビヤク)　細　小まつ也
後(ゴ)乃さ滅蜉のぬまゑ此やうあつきやむかせんとおくる極也　河　蜿(モヌナ)
年比もくる絵らてもとくしあまたありつる院乃うちこそもとし
ゐちのくせるにさへこものふくくまのあはれし結ふ
思ゆふかく心をとにはくろされたるやうなせんさいのうち
つまにもちゝのもとたりるを見いつし釈ても　院のうち
細　二条院や　栄　二条院まえへしく後結りてとせるこ今
夜こそうつし釈へ八結句せてもきに見ゆるとも
なきれはいまりて為にあるをおもかもいけへいとをとし

きえゆくちるさまは花さへ見られるに紫をいとおしとや
おくゆかしくいさきよき露のやうに見えしまゝを　宗　紫上乃
御やまひおもしきんのやうなりしかなしく人のあるまゝを
こゝ心也　弄同細　ちるや消入給ふとや
ちぎりし給へるとのまひなかりしこともなくしきれるゝ事とも給ふ
おほよあかりまて見給へるとはいとめつらしくされたる
宗　源氏乃詞　細同
かくしあみなまろこそ後れてもちまされ　宗　源乃詞也
めさし我方さへのきるをかたみゆるおもりくれ
宗　源さへ限りのやうにおほしくとや
あるらしきやと末のことをとゝめきこゆるの給へる　細
うつしくもなりぬれとかはりして　細　紫上死んや　宗同
そさへこゝにもかはりや今宵にさむさのうちに源乃嘆ありて給へるを

宗　紫上をかの御也ともこの本命し給ともいはとはおとと
やたく蓮(ハチス)の露乃うくるやうなるいのちそとみんや
細　紫上乃命露にやうに志りしのかとくるをとゝめ
我いのちへ蓮(サカ)ゑんとなり
世の給ふ
葵とうんこれ世なりてもまさ葉まむかへる露のほころびに
宗　源氏返しも来世まてもかくあらしとやん也紫上乃寺
またちはの露はかく後たちをと消しその露をとめしに
とゝまちとて亡なりる露の心あらるをかくあるや紫上を
むなる方りさとへうつるや露かとも心ありるとうる
心ちもおしきとも　細　心あらて終るとや
めて給へきさ後へかのうらなれと　宗　女三宮へ是源乃まく之給
ひ也とや

うちあるも院ありとこそしめさん為なり　聞　女三宮の御心をと
朱雀院にも女婿のやうに御しめさむと也
なま中に給はることにても思はれける代　聞　女三宮の御事を
源氏のこと給ひてもおほえそてうとくしきとや
見るほとうちまゝをまとりつる事とみえたることゝおほさく
あるうれしく　聞　紫上の心をまさと書かと女三宮よりをまさ
さとも見えとさらぬとや　細　紫上也
う給ふそんさへやうに思へるまゝんと打いひしたらく　聞　紫上
のやうにひかりかへさへ見んをとりんのあれはなる事をと云
つも花ありそうきらはしゆる也　細　病の隙也
わたる給ぬ　聞　女三宮へ源氏御わたりとや
文ある御心のおなえてみたれんとさらしくはしまくおわ
あたりのあるとやあるにひたちへとやまゝ給りよへ　聞　人の思と

え我人のうち此ひとことを人やあるらんとなとところの思と
さりなから女三宮は稲本此ことを源の志り給はんかと也給
まよりその給ふと此返答をともえし給はぬとや
自然のはかりをさい給ふ事あれともはしてはしくもお思し申る
やんくるしくされは　細　源は心くるしと給ふ也　聞　源の心すくは女三宮
の返答をもし給はぬを我わさる事を恨給ふとおもふ
なるしきとや
とりてたかしく人也給　聞　御迎なとく源のうらさきめ給ふ也
おとなしひかたる人めして御心ち此御きみとかくひ給ふ
聞　女房たちの中に年比ゆきなれたる人をめして女三宮の御様
御をと見給ふ也
まへの御さなうしぬ御心ちつよさんとうつくひあり御有様とあり也
細　御懐妊とや也　聞　同

はやしをはしめ人あめのしたきこゆるとそのをの給ふく
栄 源の心也七八年斗かくもありつるほと不審するを云給也
孫 源語わらひ給て八九年るそその懐妊なき也 細 源乃
あつかひや
清んのうちに三年はかりなるへくさいはひもつけるにたすさくと
栄 実に花散里なとにもさやうのそちなき給との源氏乃心也
不定なる清るよにまやとおほせたることにとゝもものけなくへ
志るひ給ひはさまうちなるやうに給へるさ海のいとゝらうあるを
あるを恨られとかんなまり給ふ 栄 此心のことあてハなまめきて
出ひ給ふとや 弄 女三宮乃懐妊を源氏比ゆかれる事有
ゆとも不審ま出給ふとも也 或本ニかくこそ見河海
かくありてお給しさきちくいまくる也給ふしかハ年をとえるゝ給
かそ 栄 二条院より紫上をみん捨かたく清給ふ也

二月三日おはしますと 弄 なつかしみたゝよりもいへし
いたくもとうろめかしくおほさるれと 栄 紫上乃たに出てある
うと云心え云也 細 同
清文をのこりまけしく給 栄 源よりも紫上乃うへ人第一也
此のまにはもしるほともあそにかあまりんやそや在まそうしぬせと
を見かけりると 栄 源氏乃文かよひをと女三宮比女房とも比見
てやうく二月三日とそこちなしをみてわかるを給へあまりきを
しりしぬはさ破られともそこみて猶しむ也
わたりきこえ此は御あかまりをときこしぬ人そいふ給にそうく絵よつきて
をむかうちさせ給へる 栄 女三宮比柏木とのことを給ふぬ
人を源を猶さいふや 細 三条也
彼人をかくわたらひ給ひてもさくにおほしまれくんあかまりして
かくしきことしぬ給かきつあて おくきあへり

若下二

栄 柏木も源の女三宮へ浮名をとゝめてわがあるまじきこゝろや
まちゝゝあるやうをうかゞひて紀伊守女三宮へ文さしつかはせう
事と也此密事のあらはれまじきといふ也 細 柏木也
さていりあひさ侍ぬりしの給へる傍とて人ゝまゐりなれん
恐ひゝ見んをするる 栄 源氏箱書 紫上此ゝゝ人ゝそと浮おれ
こまかなる此文をと見んをするとの也
むつゝしき拘三條をそいとんゝきれ此ちのいとしあしきに
とて御しまへれハ 栄 女三宮乃事也
猶さしたゝかき此いとおしきに侍るとやかてひろきる
まをはん人の常なるにいとゝるしさて浮几帳よりして
栄 侍従ゝ志あて見んをするる也
浮りぬ 栄 侍従ハたちのくや
いとゞもほつゐるに院へ給へてよゝもゝし行ゝて浮志となれ

下ゝは浮しきさる給ふかさやはゝ二条院へまゐり給りん
とて浮いとまきゝた給 栄 前ニ侍従ゝ人乃ゝるとを何し
こきひる源氏の浮おたるへし
ゝゝ久しうハあしまて見んと給をと 栄 女三宮ハきのゝ如
行えしや也 細 源の詞也
まさいとさまうしきたりしを見んまてゝあるやうにさる
事もしておしまいとおしまてたらん 栄 紫上の志ゝらる
たまより見んすてさかるやうにいひ行りんと也
さゝくしき心もはに人ありとももゆめんゝさき給ふらし
さるさし行てんとおもひ給まん事をさうゝきたまふ
ゝさうれことをもうゝちゝきて心も給つと 栄 女三宮
へ源氏の給わるさ傍ゝ我とらそゞ文ゝる紙中ゝのありと
をも浮見ゝあるるとも也

いとくちありてさやうにもしりあそをなかり給ふぬとなと世
のうらめしきかくさせん給ひ日のおもしにうち
かし給て此御前にさうてくまりしにくき遠にありまさう
柏木のこまをいふにくるに日くらし此花やうになくす
おとろきて給て　細　女三宮の決を海也
けしきみちたとくしうぬ條をにとて法をてきとなりから
まして
〻方　夕闇ハたとへくし月待てく遠わりをこそ風まちとも見ん　忠岑　圓嬉
月まちとくとをいふたる独をといとりやうれるなきして
の給へ　細　女三宮乃詞　栄　前の哥此為まて月まちて
くゐれわりをこそちとへ給ちるなへし
みくりもとうし　栄　源乃心也
そ風まちもとや柏木ほとんとるまきにおほして

思給ふ　栄　引哥乃詞句のかれさうにたまゝをとそれまちをも見
せとやせんとくるしまれてたちとまり給ふとも
夕露に袖ぬらせとや日くらし此鳴をきくにおきてゆくらん
栄　女三宮の哥んを日くらし此鳴をきくにおきて行々
我袖をも夕露にぬらせとや日くらしに義のんあり
細　此日晩乃鳴をきゝてはまそにまし〻ほとも浮出来
多人さまのことを也
くさなりちるんをまつをてひ出給へるをもらうさきれて
栄　女三宮此おさなうましきゆへさきをて也
はいありてあふらるしやとうちなけき給ふ　栄　暁へも出来
宵こし又こゝろまとひ給ふ也
待果ともいくさとんうにちきとみもて日くらしのこ清
源氏日か々川里ハ業とのゝとをいうそわにゐるもいて雫

殊しんとや白晩(ロクエン)なりハ人まゐりとうひなからしられぬやうた
をしたてらめ殊にとらぬさきかゝほとにたまり白晩
ありしをまり花影を引かはあしもと
古 こめやとかのものゝ日くしれ也もかくされハたちまちまかれて
細 二条院にをとまち給へる御ゆめのをとゞも
白とお帰ありかゝひてたまを情なしとんをんかゝるしられハ
さまり給ぬ志つんなくちもそらにたちめくれおもてなくてゐの
たゝるを来りなとしておほとのこゝまをぬまくあさきもくこれ
ほとにまるを給かんとてとくおまし給　哥　是こそのうき給ふ
えとの源氏のんや　哥　とまり殊くを是に是とをおもはん
ゐし
よ人のなはほりさとおとして　哥　常此扇(アフギ)のつるや　蝙蝠(カハホリ)のかい
とかくく扇をはくるをそらめしゆくへに名をとちかりとも

申し先ハおつきとゆへ檜扇(ヒアフギ)の妻とも
これを用ぬるやうそ何かられぬって檜扇をそう給て一さのふ
うらうねし給ひかりしわまりのあなかなかちゝまかりて見ん
給は　用ぬるくゝそ　細　檜扇なるへし　哥　ぬるまよもを
檜扇のつまや是を重ねてとくを来て用ぬるさゆへにとまさ
給てかへをとれ扇をまとめ給や　花宴　昇花同
持をるぬのをもくしますひかるを満ちのもれうちや
うたする中をれをしまりむたる有しゝゆるを河内をもるくひ
さ出て涛給ふるも　細　ますかの花乱や一方にも乱の家
とさらすとまあり　哥　乱ある也一方来の事有ゝゆるゝ
多るなさしうひたるとよあやもわまし不用ゆくらうか
きさ海をとかり
おさうるてあり　哥　柳まれぬを源氏持くんしつきうち

きこゆれといとえんにそてかくしめのよもかたちはうつくしうなり二つ
さまありて御くとりたるさとみ給ひまうさるへきとなりうれ
く　宗　又ありうらめしくきこえさせ給ふをといへり
うれしくのてたまひしとみ給ひ　宗　梅の木のよしとかく
御鏡なるとおもひて来しもあるへきとかゝる又すこしかなしと心も
たゝしめなり小将の君のつまにてきこえし文のさまとみるにいとい
としくもむはつくとなる心ちして　宗　源の御心とも
又とかくもつる也おもひてとは鏡のかけのひるまとのすさひ
なりやまとのこ文御心しらすると人きこえすゝむ也
けふあるときつかうにめも見ゆともいひてありしことまた
きあらしむといひうしろきゝるすはおもちゃんやうくいかにても
御ゆるしとまひあふ宮は御けしきもあるく給ひのことまに
宗
源のけうゆるとまつるかくは小将君はめきこと也

ありしとも又も女三宮のうへし給ひけんほとにとゆかしと
きこゆるなり
かれこそまたさるうらもちゐとちしなのもしかたぬくむるこつき
きこしまいうかと給ひても心あるらむてきこえるやいとまた
ありふりうたもたゞ御なさをといふうちのでゝはかへむるにし
思給ひて　細　源の心也我身の上のつまとあるはなくてうち侍る
とも　宗　おもきまのまし事きよの心也
かゝる御ありさまを　宗　源きえてや二条院へ御はしりの出きよ　細
ひとりしもて御のまゝにめるに給ひもあるさてこの物をいつ
うきたる給ひてし宗きかの御涙しつる又のこゝろのみゆく給
つれとも心もはおもしろしとお思してあそこ此なるといへ
きにいてうれたいとおもしきえ給う
宗
別や御心の人たち此きこゆるとなり　かの上

いとひなの御さまやと力なくなる　細　小侍従か詞也
いのくてをとりも給てし　細　小侍従か心をとた
人の気色しるくあらはにもてかくしとそ
細　人こそうかりしをさしに我はさぐりなし物をとや
栄　我は此文を女三宮に御覧ぜさせたる時人の気色やうな
きは我もすく気付てあるまじきことあり候はれなとお
ともちのさし候とや
御もちあれいふさるに心の物かくさり給しを　栄　いとこ心ん此
文を小侍従か人はこともめしまてり心の外をとは心うす
弄　小侍従ちかく御そなたにんやをとりかむとも給しとや
いとを給し御とはむもしかと人侍りめしをかくさも給り
らゆるとなりん御方へしも心まゆきは　栄　源の御方と力なく
と候とかりしまとや

いさゝかうしろめたしと給しくはあさともえまいらせ給へくさ
しまさましとよ侍りあまりとの給つに　栄　女三宮の詞也
おろかなる我文見ゆるに源氏のとり給しもかくし
あへぬとや　細　宮の詞
いと心くるしうよおもふくされとにくれかたあへん
栄　小侍従か詞也
何か心見し　細　小侍従也
彼君もいとくおちなくおもちてたしかならぬもまた
心をも給ふにおしなれこそ此頃給しものを御さとる
まかに侍給ことの心えてあるてくる　栄　柏木も源の御覧それ
たくうらま給とや　彼君　細　柏木也
またくいたもとなれはありさまみてくへくまも力なくさも給
かれは　栄　錦の時柏木は女三宮の御方されかまし事にまり

てうあそびしく乱れ給ふをめでたまふにはよそにてかやうのれいとも
出来奉るとや　細　鞠の時乱れし給ふこと
弄　女三宮の方をさしのぞきて鞠の庭よりも乱れ給ふさま
よりて見さしてせめ給ふとや
年はさちかきほとりにもほひとりかへり給ふこと
孟　柏木の心ちをみなしく物語をせつなき給ふことかく
まして女三宮へ柏木心ちのつきたりけんといふなくさめし
との物語りんやうくまして心のつき給ふとりかへされ
偶々にちかつき給ふとくまてしらしさらしとや　細　乱れて
給ひしゆへにこそあやうちにいせめ給へとや
かくゆきて心給ふかくしたのみさめあふいとわりく給ふ
さことく　弄　女三宮の方をさしのぞきて鞠の庭よりも乱れ給
しにやそてとまくてせめ給ふとや　孟　年は柏木にいひ

ことゆかしうと実否ちかとおもんとして思ひかぬ
ことくなり
さくらをたゝくこそ心ゆかしくわくしもののまけ
細　夢のうち地やうし思ふやうあやしき物のつひにつきとくう
らはやとや　孟　さりとなるなとや
ありゆかし風あありいふとし給ひてたてたまへりのこ
そあ紀給ひとたをやましきみく露たりとれ物もこさし
めさらん　孟　心ゆきくるれなりてさらなとや
めくたゆましくせさを給ふと乱れとをさなる給ふく　花　めのと
なとの詞也女三宮給ふと源乱れ給ふたすかく思ふにれよくお
かすりありかひとり心とくまて給ふねといふや
孟　源女三ね浮船をも浮くんしつくたり給ふさて思ふにを
ちや浮くちをとりきにそまて思ふ心とられて女三

京なる大臣にしらせても京の人々は源の
人とはかりしとや
いまはむかしのとおもひて絵をかきけるはあつかひかりしものをさりけるを人
めこともつくしてゆふおとしいはこの御事たのみにてあやしく
ひがさるれたる人にぬからかくうちつくしつゝかたらひなふぬ
かくれたりけるに　細　若上八平金たりし絶となりや
かの中納言ぬれてにおもひてしくうるよしあるかたまてかほし
それともそはかりひとつくとさうゆへくるもあしぬるみともに
もあらし
弄　さるへき女房なるへしや　孟　源の心二三の女房なり
もに相来れてにおもひかけるやかるとて見らるゝ也　宋　源氏の心
をんな三人の御事にかけ中納言とはいふ女房達の給いけり
此文のみなれて京の大相来れかくいたすれうちなくて
よみかへしおもとかせとももあるとて世かひかけと御かく
とたえぬとや
さしもあらくさひやうなる人なるもあるさまにそへりなみて
ひめもすがらとまちあかしたりしかるもとみゆとかきあり
てなきれと　細　大の大弐をとるまくうち侍り
いとうくさゆらにかくてしやあるくひとかくとそともに
あからさまにおもちかるもこそといひやうり
かへの大夫なとといひし大弐が子肥後国に勝負の
けんへあらぬきかたしし国の川にかの源かうかひかりしたと
かきぬとやとともさくりくさを此文のうちにいはせ国を
あしとも　弄同　宋　源の四ま相来れ文乃出中れ給せと
の給ひ、むさうにいかひてくるゐめあまりのゆくにこゝらや
まさるは理たれとゆちてはてしともある物たなるに
うちかつきたることなとも縣してそれ人の文とかゝる女

屋りみてそかくまのすれともや　作
蓬かやうにこ夜うたる人さたりかしにも筆をまつさそ
うきさまかたくりしらしう人乃かりたようはなうさこまさ
あり筆なとと　栄　源の我古き文書つるすとの給へり夕顔
なに夕なれうくれるは給たる宿のあかりをも見給りて
こ称る女房の中よりとんあそてにくれかとそ見ゆる白扇
つ光りそ色くる夕顔乃花そこにそうやきあくうにおきさ
らゝしたるそも何そうにあつさされたるの御よ
わりしうかほさるとあり　以夜の分を源氏のうつしたに
我有もあしぬやうよう紀まきしらり給しかとも栢
本の文はまなさ見ぬさ夜よう当る紙をもなさ給ふや
是迄ある此義の翔まゆゑうくこにあくぬまくらよ
いろうきさへ給くまなるそしそうまさうとも見えあた

そのまたにかのしろくさける花乃名を御文を使の者におふ
きたまれ源乃川寺ころしやあるくこおのこし
め取りんとこひ給へ出るのをちかん罪のがれかたく候ま
るこちれ此ほとと色ゝ何ゆりされいくまうにいてい免を給ハ
もとゝあり源氏をか様なりわくにんはうひし給ふ
こゝをもうきこ文　朧月夜よあひ給ゆへは左遷乃事
とあり給御までをもいふきをたまた源乃川と陳ほうし
給ハ用心すや　弄　源のうへよありゝ夕顔の夜ころと
らぬけれきよみきうへくこゝり給きしの事よ朧月夜
くらく人おゝかをあたれ源乃川おとさ給へり何ひ給りと
とうくうきゝ給へり物もちく給こともやとの用をこや
彼人の心をとさく見なれし給ハ　栄　柏木此心をえつさはく
見んおかし給とも也

さてもこれ人をかへりみてなし給ふへき　細　源の心也
栄　女三宮の事也
めゝしうさま〳〵の御心ちもうちそへてなみたにくれてあるまじき
見しりて何かしらくはゝりなからも　細　懐妊也　栄　柏木
始乃懐姫とやされたる程もおもひまさりしとはいへり
うちとけたまへるもありしかとかへりみんよりわりの御心
たゝかくもえらひあひなるをまかしくおほゆる紙　栄　柏木
かくてほけ〳〵しきつまなれることゝや
なをさりけれとさいひとちてめるとも心をそめぬひとつに
まことゝさ後乃かへりくんとやふかへりきうくいひ給さ
てくはなきを　細　おもかけ殺うしぬものはうちとめとこゝろ
みともまた心のおもうてつくくさ世のをとゝや　栄　たまかなか
くさましてくるともめぬへしにたれ人のよそにわくん

八宮のやうなる人こそありけれ是ハ源の太后よひ給ふ女三
宮なるといちくこも柏木ハわりなきたまは心やすくもこそあれ
とや
まいあこれ世は後をとにおかしきなれ人の心しも多なる
乃翁　細　柏木こもおほつかなることゝや
法のゝ流めとはやまり世くひしきこともありけれと
河
文徳后　仁明后　大臣女　二条后　清和后　長良女　通業平中将
花山女御　三条院后　元方　民部卿女　通小野宮　関白并道信中将
麗景殿女御　法興院入道女　兼家殿女御　女　影光大臣女
二人通右大臣宅
その道は又いふなとなり昔はかくにひとしれとも心お
ちなしなかれつゝまつるかとにそのつゝちるへきこと
まつはくもいひとうりしそ世のまつきはかりあへき

ほさこたり　宗　時のうつろはんほとはいまた人ことも面はかはりつゝ
あはれなとのうつろひちまつ色にあらはれてうつれとも
うつろふはまたものまきれもありなんとそ　細　下へいひのこ
したるや

女郎花一夜といへとまたあるもちらて序かりにつきてうかれ
たる人もありけりとまはりてあはれにかくしぬるもまたもて
て　宗　それはまたいへと好色の人にかれぬ心かはるこゝろ
何もとのことをおもはすもかくてものかたる
たる也なくしたるとまでもいへり
女郎花のさかりもゝ何も盛ともおもはぬ花かはるあやうき
たかくも野辺とさすかにもなさけもなくこゝろもあまた心も
しるはなきものあくらまなれあまた人　宗　女郎花更衣なると
の中にもたのもしからすくもりてく聊尓なるなると

みてゝろ初そとやされとおほろなきかたもありぬへし
うつろひかはりもなくぬれとはいまにみはなかくも多
ちまはらぬとや細きたる風もなくされともまさ
るてふ也
ゆくさきも又たれちきりにもてなすへしとて　細　女三の宮也
宗
源氏の宮にもまさしきと女三の宮ははゝ也
女三の宮を源の可猶猶ひとまて也
うつくしれからしさくゆくよりもいひかくしたるけは
こさめのはらひたくかまんへとくさてうちのもはもしかれ
きくひかくしや　宗　源の内侍は好色なり女三の宮ともいはひ
給のたちもさすかに宮のくましくきたらぬものとれ
嚴重におもひのにさゆうはえくらむ我とうしろさて
柏木はゆるはあるかはらつひたれたとゆもいけし

なとも厳重にとのゝかたらへ
はまたし給ひし事　河　弾(タン)指(シ)ツマハジキ
源氏と思ひ給へれとたへかねたりける御けしきにまさりて見えなん
つたなく宮つかへの程もしのひきこえまし給ひに　宗　天子は
かく給とハ思ふ御事をする所ハ我御心をさなりの心を
見奉はなく霊無(ニウヂキ)きうちはむきて大かた此御所さし
ちかうかくもてなし給ひしめをことゝもたすれ人ある
るやはつゝむへきさましさとも
思ひしあつれはこそかく此給ひことに御気色をみかくし
義をはゝくし見ゆるしたまふる此かんにうへとも心ひとつに
ものしんりにかうひきむほんあるにひき我をさまし
らぬすちよりとなるかくあるらや　宗　宮はいんりんき
しかけ給おさこれかくしぬまたまゐりさきとし義

さはかりおもひすてきこえ給ふ御こゝろにて　連なきことゝもひ
まめなる中にも曲事(クセゴト)をおほしすてられたるさまにそきこえ
ゆるしなきもあらんかしとや　細　云、方(クハウ)此御志(コロザシ)のきこえ
此の給ふことのよろしからぬをとかく数々おほしとや
給ふさまと　河　祢宜言(ギコト)讃(ヨリ)祝摩憚同也
給ふことゝもさのみこそきこえさせ給へ歌のあさましと思ふ
我身あるまじきことさへなかれんには心をゆるしてたゝおほしぬ
物をとかくとかくおもひきこえ給へれと又かくまたに出たるへき御まかせ
らるゝにさる事とおほしすてもしなかはなつきて　細　柏木はおもひかへて
おほしめされける　宗　女三宮の柏木なんどとさまなれん
空ハ思ひくるしとも我身あらしとも思ひなき給へり
源の女三宮を可然おほひ給ふなとのふかくもれ　又思ひける
かくて紫ハさやうのことなとおほしひそかにも人々ハ源氏に

ともかくもとへくいかなる事給ましきものゝとや　弄
古院の人もうく心あさましくてやあるへきそうかなと
はかなき給ふかん人そのあとにていとおもろし
又あるましき所のまちなりけれど　細　桐壺(キリツボノミカド)帝也
薄雲(ウスクモ)女院也　案　桐帝にも藤壺源の密通あはし
ともかく給ひてあさましくかくし給ふるかやとも
ちゝおとゞめしをわすれてそ　案　女三宮と柏木なる事は
吾にも是えもちくましき所ころあまりつきある
河　いかるとおれもちの我なれはいるやうめし人のとふらん
案　源の我つかれるとかの光源の山まの給しとふ人も柏木
ともかく心よそえもちくましき所にさへましるとも
はかなしるしはるかに給へと地おほしたるく所にさへなれも
弄　源乃さ苦とかり

女房　弄　紫上詞
まことのことならぬいとわしきにわかうなる給てんやりあるに
心うらしうちひやり出てし給ふやとわすれして　細　紫上の心を
見給てかくくして女三宮のはにとさえひとなかに給ふと
や　案　紫上乃ゝなりやいふ給ふいとわしきに二条院へ入らり
給へと女三宮と世給とあれも源の心れとも宮泣
え給ひ給く心うるしかるらんと紫上それをいつもやうし
給とや
うち思ふらくしくなりなく給ふとかれ宮乃ちからまし思ふ
おもはるへんり　案　紫上の詞也　細同
とくわたり給ましきをいとわしくなれとやすく給へと
案　女三宮を見すて給ひてとくへとく所おあるは宮乃御
給めいとわしきにと紫上の給ふなや我まへ人やりあら

もてはなるゝを源の女三宮はさらにと消ておりたく
へだて給へとも紫上の杉とも見舞給はんとて宮の
御くらゐ給て女三宮へ渡也なきを紙くるしう源の思ひ
給らんは紫上たのみてこそといふ心也
給へし 栞 紫上のゝ給ふとは源同心の詞也 細 源の詞
まれなるは見んと給ふ志の深きとなる心ちすとも御心を
給まゝとのつくろひのさまに思ひつゝなん 栞 女三宮の杉は懐
離ゆへなれとも年老たる后とこそゝ見ゆる花はとんや
これとて源の君の給也
うちかきは宮とひくに法はひ宮ありとも法文あり
出ける 弄 女三宮のおこんへ源のわたりかはすやと云御文の文にも
なり 栞 法泉院の法ハより也 なつかしうとしや
うれ院のいと長くたるうくいひなして給へまいらせよとかくお

はしたるなるへし 栞 朱雀院の法へ女三宮の法事を
恵り給をかうらいまなくてまうで給ふも此氏恵の
し給そとや
もてしおかんにたるとも給へんをうらさくおはさんと
とのいひと給しまやかてうのまゝ給へも 栞 源氏の女三
宮をあづけ給ひて法師も朱雀院とおぼさん所など
わづらはしと此源の詞也法二ツのことそこらさとりて
うちのさゝめきもうつくしめしといひなし
給ひんしてんかゝるしくゝめ 細 紫上の詞 栞 紫上の詞也
法の女三宮にめで給ふると思召さんよりも女三宮
のうしろめたくおもひ給ひんとて紫上は思ひしるしくゝめと
なりとうつくしや女三宮の事を思ひて此より紫上の
よろしくおぼさむ此代のおほひのゆへを我なき世まし給

中人頭の三条院よりつきそひて女三宮の御ことをとかくしあ
見付とや
よれなき御けしきもこめぬほどもうつくしぬけ給ひぬ御心ざしあなたの人
ひとりうちとけてあいなくもさいとくちかしくうちちゃんなどの
給ふ也　源　女三の宮はさまでおぼさねども御心づくしの人なと
になりしとや
まれに御みかたちいまそ人のまとめ給ひそ見えつゝかうしたりつゝ給へる
見ても御つまならぬとまつりかへしてはやくもやとおぼしまさんへ
のこゝろまさへ思ひめぐらさるゝなど　弁　御かくそみ人の人の
ようになひあはれなるものとともおもくなると見えけり
らうたき御ありさまとなりうかうは深き御ことにとや
細
源氏の御深切りそすへかうみえ人の勝言にいとまし
なれど見えは御ありさまとゆかしうて侍りけり

身そあさましきことかあるとや
られぬたく御まれ給ふやまき給へんとさへおもひとりくす
ら女はあさき心ちそして常に思ひよそへての給ひなすき
らんは　栄　此乃心を見さだめ我身の人の為にものまうけ
られしことゝさためもとも我身のまさりけるかな
まそんせよれ人の心やらんとやらくやしかんなるべくおもひ
そこ物ものれとも女三宮をも源の心しめまきれ
ほどなりけるひ行ひをさきんせんとりおなつかしん
おもひとしるしくきてともよりされども人の女三の宮
まちゐてまことしまさき八源の女御も給ひて天子此後
んやさきて給ふんとや本たてまつり御たのみをなく
身そ浅きこゝろとや落葉女三宮人の心さしみえあ
らまほしきことわりなんかしるべし　又あさまし心ちそ

すけり宮ハ女三をかけたる浅とや

まいらせ給ひたらんハいとかたくもありてとんのともかく

覚とのはし給ふを　細　紫上六条院へ渡給へき時なるへし

きとや　抄　紫上のうち悪くなり給て此比時

源をはなれて六条院へありし給へんとや

こゝにまいりし心中もくるしけんまいりたまひし給はく

細　紫上此詞　抄　我ハ二条院ニまかりて心中よくて

あらん源氏ハまつおほしめし給へとや

人乃はらんをもすくなくはらんはらしとそこらしもし給

はらに　抄　女三宮此儀もなくなく給へんかとはなの

給ひく源をはなれとなくめ給也

自らをしぬ　聞　人の給ひくいつまでもまて給はひで

非定ハ少くわたり給ぬ自らは乃なきをも人の心つくしきに

のこたかなにを今ハわかれぬとくらきぬまでつくなりぬ

名也とおもひ　抄　女三宮の心は源乃好くらなるとおもふとを

はつしき給へり思ひしをもせりかふはれがたのはなしくもき

なりけれハかくそくし給ふ事まつ給とや

院をうらめしつきくのべにはらしめさんと世中はうき

見えなん　抄　朱雀院も柏木密通の事をしろし給てハいか

らんとはつかしく思ひ給女三宮乃心也

彼人をもうらみはなれのこしひとつれともこゝろをもてつらし

くもひなきをすて　抄　柏木ハ源乃彼文かくしつきぬる

さとをもたまふまうけ給ひて小侍従をとせくきかさぬ

とく文をあひなまんと催促し給とや

うらみなんとはしきとくれを　抄　柏木此文源の返なり

しつきなしを小侍従かいひやるゝ也

いとおさまりしを　宗　福本此句や
前句の作とに付る所にてききんう侍るへありふれもとのつ
うらゝしおみくことも也らつるやうまやとそう／るにいとはく
ましく　宗　まこと久しうくぬれとの心や
定まりぬつきたるやうにおほしを　河　天眼(テンゲン)乃るゝ見ゆなり
隠密(オンミツ)もることとも四気(シキ)とて天地人我乃四ハ気るゝ也真御
あるも天への照覧(セウラン)甚一也　宗　天眼よりも見へあらはしあふ
やうにおほしとや
ましてさゝろむきことく人くも何しぬりしるゝとまもと見路
ひらくらんきうしもかくしあれくらうしてなり
宗　福本乃又やまたうつましきとの福本此んや見へ路くを
んとハ当るまとの心や
殊々まくことも本々此になれと

捨すき
蒼指をも殊々きくことある猫とる事と我らひろ記を此句うらん
あるも志ぬるるにもちしてはそんうられくおほめ　宗　おそう
くるくるさむきさや　宗　此まへあつき此あれと殊々もく
しうて風乃あたりもむむことくし源の此とも残気路
まとおもへたうれしきことれあおしむやうたるとや
余此まあこととみもあくことみもめしまつりしさうりあれ
つる猫とへまうれこまやうにおほしさくめる涼此くしき此所
さまてにあうしきことあきまかしくおほきたれものなり
こゝろをとられなまりてきいうてうそめとも見へあくをなまん
侍りとてうきさ絶のめまく気しく侍らんとへぬあやしく
宗　福本あと源の庭あつる路ことをとうへうまめことせ
可憐密(ミツ)に凝(コ)ことや
のれ涼心みもおほしあきまんことの心うしさるとやきそうし

よし心ちもいとゞなやましくて 同 源氏のなるや
うちへも参らで 同 桑門なるともしほるゝや
かしくおもふきはもなきことはかなき人さまなりしぬと 同 流(ルザイ)罪なる
とみはおもひこそやられぬや
あはれいとゞになりぬることちもされて
後模 あはれともいふへき人は思ほえて身のいたつらになりぬへきかれ
されどもなとか此世をわか心とはいとはしく思ほえ 同 業比とく
源の志の行ならずまとれぬ也
いそや志川やにもみえたるまよひ乃こし給ふなりなどそや
まつまきれとのちかさもなる人さこそうらみ給へしと
緻 柏木の衛門のかみをひきまさんとそめくらひ給ふ 給也
同 柏木此也女三の宮乃(カンベツ)けかりをおもひさまさんとてなかうり
魂(サ)を付ておもひも思ひの女三の宮はなくしきんあくさう

いふなれやなまとゝもやかれこそのこちきゝやうは前の鞠乃
時のうけや
木ねのおもひ行つるゝしさかんともしろをとてそおもひあらはれ
ろ志ゐて時うけをおもひさまさんとおもふにくあれうち
あんつきなましましさうすやあらん 同 夕霧と鞠のとおろ
くるしきをとおもふのしさう見えしとや
よるゆめにみえてもおもまゝ見しおもむき給ふにおもほえてにあらく
なるら人を 同 あやうきは可能といひて女三宮此やうきなれは
おもまりにおもうぬけさそとや
世のありけふとも志らずもそ 同 世をまよへのなにとおもつらんこ
ともとも志らずもそあやしきみ此御うらん也
夕川さうつし娘人まんやきさ給くけもなくて 同 夕川をめくな
空のやうにけふつし娘人まんやとくるすともなくとは小竹汲り

いつにやとも驚(キヤウガク)し給ふ同心し給ひはそれかやうなれと
ハ以てさまあしきことゝや　細　めしつかふ人々をもすこしへさ
人をゑらひ給へきにや
かくいとわりなき心あれ共さめも　宗　女三宮のことにや
人の心あさくさる事もあるへけれと　宗　柏木のかくことを
いへり
彼心(?)まよひなるへしさとえ云ひとすかされ給ふは　孫　柏木の
心強(?)とうゆうも女三宮の方に心を云ひ強(?)よしや　宗　女三宮
我えいひをかれもねよや御ゆへは懐姫のことを下に思
ひ給ゆへなるへし
又ハいとうらむるにくきあやにくなる所さ良の方といひて
ゐしく　宗　女三宮のたゆみ給ふさまをいへり
かくいひさす給ひつゝそて八何ゆくなくに　孫　源の女三宮と云

たれちて又あやふくにおほしくてわたり給ふ也
うれしきまゝにいと恥ふかしさのミえうれハいとくるしと
給ひて見たまひ給ふつまてともいてゝいと打しく思ひさる
花　おほしさわうれしきまゝに猶すてハ又いてとひとり兵部卿宮の大將ニ給や
物語すゝもよ後の方にも不可為(セウカトウ)流布也ゝと　細　源のいへり
給へるや花なる引歌面白し
清(?)いのりあるをはさりくにせさせ給ふ大ことろなすへあたりしけ
うらしきをゆくいそうしく御心とるすくめてあてしき心
思ふさまの給まし給　宗　懐姫の心行(キヤウ)様也
あたらくうちかへしひやうし給ふはいとゝさられく心ゆえさ
たわまてかさりしつてきぬれと　宗　大ゝさ様ハ前ことまかも
うらとも心をちくるとうるしひ給ことゝハまことのやう
みなすられやそこくめでたりしを清くろひく源乃君を

みづし給ふべし
人目ばかりをおぼし見るべし 表向きばかりにて也 抄 源のこゝろうくとおぼし給
けうひ給ふべし
此御心のうちもくるしかるべき 弄 女三宮のこゝろうく
思しさとの源乃御心也又説（セツ）有 此御心のうちといふを源氏
心のたのしてみるとも可然ともいへり 花 同御女三宮のさ
ぞおぼさんとむかふるしくさんおぼさるとや又源氏
御心のうちを女三宮のくるしくおぼえ給ふらんとも云り
給ふのみさとをもおぼしつゝ涙のこぼれ給ふぬり 弄 源氏ハ彼
文をたるとけふんしつきたるとも大かたしきに女三宮
ハ見るまじくおぼしぬれんと行てんぐるしきかるを
見るはいとおぼさたまふとや
みるべくとまりたくおぼしめるさ候とんおぼさせ

細 女三宮也
いとうくおもひみるもそうし 弄 女三宮の心がさかりにおもふ
きにようて不思議（フシギ）乃いでくるぞとや
よきやうなる御ひとつのおほきなるさまとなるくさくれ給ふと
の中をたのまはさなりとおぼしけり世中なへくこうしるめ
く 弄 おもさるしうたやうたるは可然といへともたのも
しきかたのさられて付しき給ふぞとや
女御のおほきなるをやさしくに主給ふるさまやうにところう
きゆきさんハまことんてんゝされたまんし 弄 明石姫君也
此御の中をつくられまでは第一ハかゝれのことそれなそこんう
とおほきのことに源氏乃心ハ世中なるべきかくしろぬさ
きとや 河 もうさまハおもとなされんや 給ふまじきとなどや
うや 弄 明石女御乃事を源のいひ給ふ 細 明石女御也

女ハうちにゐるをぬすまれたるときくにもあるまじけれしき
まや　栄　女ハ修羅もつくしきそうしへのさとたまゝ
くもとだくへのあれつゝうちそへくる風めもとまらあや
まちかをしつるや
ゐるまじきにかくとめくまいりしにはまうしぬあやまちかへし
そうるものおもひとおぼえて　孫　まうくしとゆふたるにそ
あるまじききゝをもはつかしや
大の本とくれ水のなかれとなりしそくあいかうらめしもなく
栄　むかしのゆかりや　細　同
おもうくより花ちられはせにさかしかもやまつくはりのあ
路られと　栄　蝶まで下向のことや
うとくしもちらうあらせて　栄　武蔵のへんのさとしてちもぬ
ゲまうとふらふしきかや

秋もあらしにそれやみまかしるや　栄　源もかやの面う
すりし路りしとも
みてきんのそうもぬぬもしもかりしとし　栄　寿もさうれんを
源氏でゐ路とも
あるらにはまたましまてゆきくし　栄　武蔵のかくへ
源のあるさし時へともこゆれからもとも力あはれ可能
衛りまてそうし路しへそとも
咲おとくれ　栄　舞の花や
ゐるむさしの女房うちあひのかきそうちきたるとらへかくとを
さやうにまてされまてゐるとをへはもりかしなくまと
細　小弁をひかり　栄　無心とへいきもなく人とかり女房
中ハ弁れかもとのゝや大ぬの心をふて御事路と
有しうとつゆるまもひき路のぬとや　舞の花の御事路と

とあまり刀をぬきたちあかつて刀をさやに
おさめしにゆるされ申さるるまいぞと　宗　文覚待文
源氏あまたにありけれ共てんぢくのみまでうかへたり頼
そとや
我らと共にあつる上はなさけをかけたまへと申しなれと　宗　武蔵坊
とてんぢくまでひろくつゝいて八たなおそろしや
今さらかくれもないとおもふ事なれとぞ　宗　源のさかりけれと
をとこまさり給へ共義経なる武蔵坊弁慶ぞとや
英ゆうの中にありけれともたゝかひそのまゝ申さんもあふれと
かくこゝをもつれまいとおもふまい物ならもまてすゞしるす
とうもまことになひかひてハもとうそうくしさらひかりて
まし　細　舞台と武蔵との英ゆうの中にあれハ武蔵坊弁慶
義経ともさしむるとも申あふて宗へられとん

のゆるされぬとあるいはらそてあらましとや　宗　武蔵
とてんぢくの国ハ生所をかへて縁者られるかとやされと
をもおもいちをもあつらへびきしのゆえてひはるなる
らき世のんをもろくしく心もとろくなりくきた親のい
ひおくを給へたるしに親大すれともそともかくても
おもふしてとおもいしまし物にかへら親のあふひ頼と
をも又されくの心とおもひさ頼ともちそて八幡なりて
何事ともをやうまんや　弁　細二同
ひとつくまて宗としかりさきすりて御ありとり
細　武蔵坊の人　弁同　孫　武蔵をとふ限めるなや
二条乃内裏のきんの君をとハたすをまきみれおもひてくとし
給へとかくしろめるたもちれるうた物ありおもしなろ
て　くもりの君　宗　朧月夜のそやうくしちあるまで

ちとハ女三宮と柏木との事をさし給ふ朧月夜と源と
の昔の事にはよそへぬる也 花鳥より朧月夜の事と
彼是いふやうなるしハ女三宮の事也是は其事ハのたまはすして
ハ内侍督の尼になり給へる事也 弄 明石の事とて
朧月夜乃尊ま乃ことゝ 細 朧月夜也
うちとけんはいかゞとも心くるしう思ふなるへき給ふなり
孝 女三宮の事とゆへ朧月夜のふかゝりしを思ひ給へしおもと
をさるへし 箕 源は朧月夜のやうにて月ふかく給ふしまゝ
心と思ひ出し給ふとや 花鳥 是女三のさくら乃給へり
岫行
はかなきはかなきことし給ひてたりと出給ひてハいと口
おしく心うきさまにてまつはらはひ出給ふ 細 朧月夜出
家し給へり 箕 源もうとくしさ給へハとのつま

ら出家とも也
今なんとしたまひける給ふにはさるまじき事ありとも
出家し給ふ 細 紫前ともなりしや 箕 尼になり給ふとなへて
ほのめかし給はぬそ浅くしもなくきこゆる也
あはれなることをきこゆるにはさし給はぬ事をかくれなき ま
細 此尼になり給へることもうちつけにハいとくちをしきやも知る
きれうつろひもそむきゆへさなれはとも也 箕 源氏ハ源氏
も海へ左遷し給ふも朧月夜ゆへなれハと文尼になり給ふ
給世をそむくにも出家まつさきにも涙もおちてにと
ハさそれゆへなるまゝも朧月夜ゆへとの心からにて海士
とさかなとうちまゆ也
さ海しくなる世はこよみさふるまえもしはあまてもをと
くれ出ぬへきのはとかしきと 孝 みなまた文の詞也 箕 源遁世の

ちぎとよまでハよくきこゆるとや
おほしき何ともおもひつるにはとかくれもあまりなるにこそ
とほられけるたんなきとおほくせのこゆる　宗　勝月殿の源
のうけなどいひすてゝ行と也迴向の伴人ハへ給ちんかと哀
をおほくるきゆるなり　細　とまて八文云たるへし
とくわかしきゆしことなりれと　細　来蓮院の法山籠の河く
ちの立行しとなる也　宗　来蓮院のまうちの世此衛より勝月
殿とも世をのかれ給ちんといひつゆしうてもともこう心の
しゆとや
此は色もうたへつてひとくへすへきつわかしりつ行かぬことる
きとんのうちきたり　細　源乃さまもろきゆひしるへし
宗　源のんなどうまゆるよくはしひてとりて出家とを沙汰し
行との勝月殿乃んや

昔よりもはかなき法要ぞとさんかうゆにさくしとおほしきう
まゐるもとうくよわけしゆそくるはせいまはかくしとかゝ
よろまして法文のとちめをもわかれはく紀とく
児ろくうきこゆすとつきあるといふとわかし　細　思へ来り給ひぬ
さもれよりも此契りや
はぎたるか世とはあらひとわりよのこころ給ふめしとあくまぬと
の給ひもいふるにたるんまん　細　文の和　宗　勝月殿たるらん
つゝ給ひけり源とも出家よまうれさるとの給ふらんまにさ
みてあるやとの文字也
海士舟よいつくハ行すひとくきえんあつかれうしにつきうとせし君
宗　勝月殿在へハ我なりんさしとの給ハ知らぬや悩みとゆへ
みそてもまへともさしるゆかへと朧月殿ゆへなるれとも際
じてよめるやあるしれうくしにつきうせし君とはゆふえ

ゆくへにいさゝかせし源氏そふとも海士のすり居りとこそきくさ

さ　弁　源ハ明んとゆくへはほさん行給ふは我すれ行方を

られ給ふとの給へんとよあり我ゆくへの中ふそちすさぬんや

細　明んとゆくへに明んさへろり給へるやわかあゆくへみえぬそ

なりけりしとや

志らうみそもあまの白きかとふかくこもいくへとあり(ま)らふおあはよに

ひのうミにゝくしさるふにさし給へる　河　廻(エ)向(カウ)之文(モン)　願(グワン)以(イ)此(シ)功(ク)徳(ドク)

普及(フキウ)於(ヨ)一切(サイ)　我等(カトウ)與(ヨ)衆生(シユジヤウ)　皆共(カイグ)成佛道(ジヤウブツタウ)

あまの白き門(カド)とて善心示現のみちもかくあまの白きに

うかや　細　普及於一切乃んや

まぬのみあれといふくもくしあら筆はんひちをみりくさ

くわりしぎたり　宗　志らしつる筆つくひやいりもとりし

てうさ給へいまへいとこそり

二条院すわらしまほはやとかく　女　女三宮より源乃二条院

へわたり給ふところに見えしたり

女三宮もいまもむきにさしぬるとふかく力をなり給ふ

宗　朧月秋乃出家し給ての文字すれたもをされともそ

うそぬるまほとすれハ出家より力んを事しせらるゝや

宗とぬると　弁　出家し給ふや　細　ともちめまれんも

いとゝくこそいふしめしまいよあれ　宗　朧月秋乃帝ハ久しれ

ゆくへのそうしによとひさわら給ふともそ源ニより

弁　ふりくまとんと源乃出家よまくされぬとよう給ふしとや

あちるのミよふも給ひしとや　細　此帝のことや

まことろさすやあさきりくんほそいま世中此有為をとうく

見つることしつるやうかするよ　細　これやまるもうき給ふて恋

友(とも)をしとや　宗　源の法んとの給へり我ハさくても

よのあつかひにてつかまつるなりとや
まへの世中為てもたのまれぬ身の心ひかりし　宗　大かた此
世乃事ふても御ひかへさん人を朧月夜さては東院
なとそへては六条院の事も思ふまうり給へき曲と性
氏乃心也
時くにつきてわかれなとも志かとゆへなともまくさひすそなか
りけれむつひかりし人くさんを東院と云事とそてハのこり
有つるをとりもれうむとさなそくさいかんてさ心かかしう
はとめてまうされたるくわてたるひまし給ひまそとめり
　宗
花散里ハつきてもなかとまり哀とまくさぬハ御
院と朧月夜とや
かくされるむさ　細　槿東院乃出家とうかくれたり　弄
こらえ人乃かりさまをとさて心乃中に　こうれ人　同
　宗
わりくのくやあまくとれんや
人の有さ傍を　細　東院ほとの貞女ハあらりしとや　弄　槿斎院の
あらくてさまにはもとつにあつりしさことの
ことや槿乃神也
彼人の事をくひましはもあくまりけるを　細　女三宮也
　宗
花ハ斎院のるや源氏ほまくさ乃人をと給まんあらう
あつりしをさくを東院まあはらんだまるなりとや
女子わりしまそんれとよひとうるへとわさありけるを
まくでるといへん物ハめま力へぬまさまてあやれ心まま
まうきとうしわひさんおとのんへりひハちそとちらくうえ
くあり　宗　さへし月ま力へぬまのあまれて親のこゝろり
をまつきぬおとあつれハその事ハ不及力とや
すくこそあまくらくまむをとさくるまし云さ奘り

見られ　弁　源の心はとかくはなまめかしく見ゆべしと也（秘釈アリ）
これ源語よくしてこそと見え源乃姫君あまたもましさ
ぬる色もされハ昔ハあまたちなくてもなまめかしき
わ月めしきるとやいひをそくさてこのかくるもの
やうなせをのかれるとし又我も年ゆきはつまるくなん
露りがりしきことゝもありしとや　箋　源乃詞子明石
姫君ひとりハ中くよろしきぞとや儀ん（ニカヘレナカラ）を見てぞなまじ
きさ契りなきや
年ふりてこしさらし涙とハたゝくしれとなやさ海くに
見んまのしうちともなんあけうしきわりくなりし　細　ましき
わかき時や　箋　源のかくまし時も涙みれども心細
ことゝもさうくしく見給ふあまたこそまいらすとも
ぎなきしめくゐめしとや

わが兄をと知りて枕のしたて世に給へ　箋　女一宮をと紫上
ありしよりやうはそみてや給へと源の給や　細　今上女
一宮や紫上やしたしみひきそて行や
女御をもあのくみかくゑり給ほとあくてうくいとさらなる
ましくひとし給へあすみをもとろへまとあふうるそ
物し給ふらん　箋　明石姫君れるうやものゝさだかくたり
給ひとあきくはもとろかい御あつれまして人ひと詞の
心ましうそうひ月は涙ひきまれあうれも紫上をなそて
行へとの給や
みえちるんたちをあくらかまと　箋　あくまて可然うなき
れゝろや　弁　思ひしてのここらしちれるやとの給ふく
人なそんはるまつしろて世とのとうにもそへし給ふんなう
しろめきうはらましきこころを書つきまつりし花をきるなり

あかうきさとをかくとき彼のうちにさしれ　案　内親王ハひとりのま
しまひつ女宮とあれたにあ男ともちがひとみすとあつらるゝ
をとたくあすれやうまめされとまよりきさやや
うつゝまうく彼たちく人さとのつゝまれすとさとゆきされ
ぬるをとあると思ふ給へ八　弄　人ゝよ嫁きるゝすくく　案　只人
あるとハ後ろ見まうしきてよとさとゆくろあるともあるそ
と思ふ給や
あらくしきさけまれとうしろとあくゆともよにあるらん
うきらさハりんまゝぬやうあらしとむかる　案　其上に廿三夜也
思ふよあらんやとハをちくゝゆともうろさなまん
とれ卑下の詞也
いるゝらんとて　弄　妙也命をたのまて定たる紀世あるとに
と給ふ詞あるへし　案　むさしくあふくへしあると詞

みそのでゝ行ので心はこゝあてかくれとくいるゝ妙也
たゝとよのゝとゝろけらをみつくかくゆゑまのきて行くる
ひとゝゝとゝくゝらわらとあすくし給ふ人ゝくみとゝしゆまゝしく
こゝハ思ふゝ給ふり　案　朧月夜ゝ東宮へあまとれさくらわりゝとも
たゝく思ふとそもしき給ふゝりゝしゆしさとや其上ハ山に
さりきぬとゆゝしゝとや
うんの系のまさ彼らの行へしんけゝぞくしあると　案　朧月夜の
君は妙給よ里けとそく源氏よりまくしてんとや
細
勝月夜也
まくゝらかあのま一妙かとえとかくし給へさるを　弄　朧月夜の
君は妙給しへ給ふすれハまゝくの女房こともまうじ裁あれ
やや　案　勝月夜のゝれ女房とゝちゝとこし云楽内な
ゝ人々れたまゆハとかくひ給ふらんとや

あさちとハいろにぬかあるそ　宗　袈裟(ケサ)の袋のうら
そうきやうさま給へ　宗　墨染にくらし給へとや
ひとゝころを六条院東乃方にあつけきこえん　細　花散里也
宗　二条院ハおなしく紫の上の六条院東とハ云り
うちつゝきてほうしたちもふたりつかうまつるめもしきりなる
御つかひのかよふを見給てえあるまじきとも思ひ給ふにあはれ
みなのひとゝころもとこそしほらせ給へ　宗　ゆかりかゝめ
まてハおほかたにたえてハまかせ給日ころの尼に
ハ細かなるともかゝるめもわりなくそうしてる紀やかなり
みやうて給へとや法服(ホウフク)　細　おほかたにせさせんをそへむきたる
やうなることもましくさとや
法ハ色のかへめして　細　金銀(キンギン)の細工(サイク)比事なるべし調度(テウド)
のたしかなるや　弄　同　河　作物所(ツクモトコロ)(ツクリモノ)

尼のしつら尼乃法ゆるされとも　宗　花皿(ハナサラ)の下にかしこく給ふ也
さるべきさしもあめの給ハ　宗　可然ものゝ始としてそのみさ
しとももなくまのとれ給へるとや
清志とねうらもちしろ屏風本丁とものうちもいとうきのてま
さしもうへるまいかいそへるを給へるかうて山乃みやとのゆとも
しそ林とかうたるを　弄　うらむしろ如何(イカン)くと
八月ハ大将乃御母上の月なれはかゝることかもひ給はん
御ゆかりなるへし　宗　夕霧ハ大将比母葵上忌月なれとも
夕霧御遊(フウ)ありし給へて悲(ヒ)す父とも法要の楽(ガク)乃あるへき
のみつかんまいとかあるましきとや　細　葵上の忌月也
九月ハ院乃おほきさき乃おれかくれ給ひし月なれハ十月にと
おもひしきうるを　宗　悪后(アクキサキ)弘徽殿(コキデン)女御乃御忌月(キゲツ)也朱雀
院の御母后也

唯文つくるやうし給へハ文の心ぬ　宗　女三宮の事也
遠山の鐘ハゆけあつらんかたきもん　細　落葉宮也
それ月見をえ来り給ふ由以き申とてこゝろへ山のみえく
こゝろにかの事もしくときゝを清くし給ふ
宗　女三宮落葉宮なとの此所へ来り給て文乃讃あれしとゝし
給へハ文月にかたしみ心ちて中ハ柏木也父内府乃給
思し給とや玉月とは花月山は出雲路しのそて
て秋と見え給へハ八月九月又正月ゝもにのひく神無月
とのさめしまゝしに女三宮出給へハ女二宮なとり神無月
月は清く照光と給ひしと玉月と云へり
むのえとそれつゝてみそるひ折して云そ給へる程なや
まらうと来れ給しをやまひつきそのたまそら給
細　柏木も病中なりし山の由所へ来り給也　細　柏木卿

と出家ありしをこれとはいてゝは出給ふ也
文をよみてくれものとは給まつとて打しとのと君月し
あけくあれや何ゝん月打ゆくうさあるり給まうにいとゝる
しまとにありしまきハ　細　女三宮冷泉院の後也
宗　女三宮も源の院へ消息ありしと思ひ給へるやうや月を
みさるれをゆかくとゝまりなとなるとや
院へハんとも云ふ時そ給ふとくそあれいへとさりまたにいて
そわるさましてかくなとやそをいとゝら給ふといふにありきんと
あけうくそれゆにかけりしまけく見ハのりちと
おほしめきることも落葉女三宮ゆくうちんと思ふきゝ給てんに借
院　細　源也　宗　源ハ柏木れちつくしきと歌行とや
おとしもてまつられ給ひてそうし給　宗　君上の感気也
とかきこれや

西山の御寺にこもりて後ハ心やすくおぼしめさるべきを猶
宗 朱雀院も女三宮の御ためにハ心のやみとおぼしめさるゝ也
くるしき御事也 細 朱雀院也
月頃ハいかにとばかりの御とぶらひもなかりしを大やう
まことのおもむきハいかにとおぼしめして御心ざしのほどを
とぶらひきこえんとおぼしめして 細 女三宮ハいかにぞ源の御かた
絶ず思召也 宗 源ハ二条院におはしまして女三
宮へハかよはせ給ふことも稀なるやうに聞召て御
心もとなくおぼしめさるゝとぞ
さるべき事どもハいかにとかくおぼしめしつゝ御心にかけ
させ給ひてもむつかしき事をおぼしめし 宗 山の御寺の御心地
源の女三宮をいかにとおぼすらんと心ぐるしくおぼしけり
あはれなる御心ざし也さま〳〵の事ども聞え給ひて泄(セウ)上たまふ也

さればこそ御心のうちにハ御とぶらひもありて御心
をよせさせ給ひてきこえさせ給ふ 源 女三宮とも源とも此御ふみをさ
薩院の御心 宗 大やう紫上をいかにおぼすらんと御心をとゞめ給ひけり
も源の御心ざしのほどをおぼしめして御心のうちハ源二条院の御住
ゐの事も女三宮ハ曲(クセゴト)なきやうにとて推量(スイリヤウ)し給ふ也
とのゐの所よりも御文おほく聞え給ふことゞもを
ろおそかにおぼしめさるゝにや 宗 女三宮ハ気(ケ)色もなき事を
きこえさせ給ふにこそ紫上なる御心をも申させ給はめ
山の御寺のおぼしめしよるとぞ
うちとけても御心ざしのほどをきこえさせ給ひてもしけれど
きこえさせ給ひてもいかにおぼしめすらんとさへぞおぼし
けるにも 細 朱雀院の御心にも内裏(ダイリ)にもかの女御更衣(カウイ)
かうつきとしへさだめなきよしを御覧じつゝもあはれにおぼしめし

二条院ハ源のまし〳〵し時ハ源氏をさなきにハいかにされたることゝもと
と源氏をこひられたる也　花ちるさとと云詞伊勢物語にあり
此物語にハあまた所におもひ日本紀なとの風俗をも取入たるや
記にに言をもてなし侍る也又催馬楽なとの詞をもとりよせて
名を詞もうちきこえたることをいまも文字にとりなしをかし侍るなる
をとりつゝあるをしも心をしりて此詞をんなの心をあらはしたるにや
案
梅枝中ニ君とゝまりて宮つかへしける此詞をとりて此帖をとり給ふも云
ごと又ハまことゝみえくるもあはれにおもひやりてこそとかひなけれと
と此帖にことも后女御のかたへ参るゝことものゝたまへるや
三位のたすけたる御心ほそくし給ふれとたゞ此みちをたえ
あれたるにて　案　山の座主乃僧都上達部此ほとにハ初雪せさせ給ひしの
法ん也此度ともはふをとかく云ふのかたりと云り
宮すゝ法文こきまゐらせ給ふ次第をもて　案　山乃座主のつゝけり女三宮

へまつるや
聖とく初〳〵より源とみえくるを給　案　源乃文と見給へし也
子此出とくもちすて志すちくもゝのをしぬ給はぬ其後ハいまさくて
のこ我か身乃ものゝ哀なん何かれなりし有るものゝ中に給なる
さ海のこりし里をよくし給　案　朱雀院法文の詞志ちしく
ハ物くの心や　細　同
世ひやる身もおもひそ世中さひしくいかにいかなるらむあり
法事ひとくし給へ　案　朱雀院乃給んとせ此事法いそなり
とも女三乃法るゝを祈念し給ふ其志ちるをもなれらい
うくきのなや
うくあしきたへるにしおもるとおもふるきますてかしつとうか
に何の外かはいてとおもくれいそうわさにちらんあるともとし色
御きぬへり　案　源乃うとくしきなるとくふひそくそれかゝし

つとかゝりきこえ給ふとや
いとくるしきを心えられ侍らねは　これはさまあしき
ことをきこえさしめ給へるにはあらて　細　源の心也
栄　源の山にの御消息を御覧して女の心やうはうちきゝ
はさ御しさきをと御らんし女三宮の御かへり不思議(フシギ)なる也
さもこそと思ひさたまりぬとの心也
わかれこたりは御いかにのこゝろおもひしらんとさもある
つとおほしつゝまゝく　栄　源のおもふこともおほしゝりて
めさんは栄心との心也
さ御返事とはいかに心にかなふ給　栄　源の御顔也
心えられさとき給ふへきこそ　細　源の心とめ迷惑(メイワク)とや
思ふことをいとゝくるしうされ　細　源の身にて面目(メンボク)なきれ
心やへのよことつきなれうときゝなからしめのこと也

なりもひとりきこえ給ふをあつまりと思ふ人の見とかむる
ことは侍らしとてきこえ給ふ也　栄　女三宮の御をも避(サケ)に不思議
乃子細なとも源へおもふにわけしめさぬ也
ところさらにきこゆるにつあるんとの給へは　細　雅人朱雀院へ申
侍そとや　栄　さやうれはとも人の見とかめもしとおほす
またすさうる人の山乃御にみそかやうなやしきるそとや
ちかくひとにさ給へる法をもなとやとうたかひきこえなり
栄　女三宮の御かへりや
いとおもしやきてこの思ひまつりし給へるにとあなかりわりし
昇　くるしとよみありきく
わきなき御消息へと見えも御給ていとくるしうゆめさうる事を
給たり当時とも　栄　山の法師乃女三宮御おもさしれるまさしきと
よく見えたまひ給て今いまとなく御いりしめきこそとや

哀とひはかりもなきまゝハ 案 朱雀院の女三宮のかくとうしろめたく

くおほし給ふ心を源のおもひはかりきこえ給ふと也

今より後もよろつのなんかうまつりてもいかてかくしとおもふを

細 又いつやうれへきもあるへきと也 案 女三宮を源氏の御後見

やまひしきことおほしたるも也 孟 同

うちの御こゝろにしてもいとこゝろしめきこえんとの御をもつくしはてゝ

世をそむき 孟 かう人のこと八朱雀の御後を源あまりてとの給ふなるへ

し 細 かう人とハ朱雀院やそむくとハ女三宮を御心すゝめ

あやしき給ふと也 孟同 弄 女三の宮の御うしろ也

こゝにはおほくこゝろもとなくやかてそあらん 案 源氏さへやすく給

をそかとのんや

いとつまらしくたゝ人の世をもちひてたのもしくあつかへきるひん

みそらさえかうにあさましとのことおほかりし 花 おほく人の世をもち

もろこしにおもひきとハとの中にとをかへりてかうたにおもひ

しめきと也 細 朱雀院いふかひなくおもふ人の中まかに

やむことなきめしきこえんと也 猶まゐりて下まふまゐり 弄同

孟 女三のかたなるへし 猶ありしとのやうにいふらんとおほしきこえ

さくへるをいのちハほんのうちひくへるとハ源なとの給と

ともをハかうに深さこそとのことおほかりめすと也

たくさきはうる御後を猶もあるまへりしくめさるれ御のこ

案 源のことハ此年もさきと給へともめさるれ給て女三宮の御あ

つかりしくおもひ給そと也

尤のすゝ給ふかんもうらくたくちかしくもうまてくるも世のよし

ゆるをと 細 年妻の御とよせ也女三宮尤んすゝ給うらんと也

院の御かしまさんかとハあまそゝもろきめてうれよりしとうるて

あるやう給はん 案 朱雀院の御病今此中を遍女三宮の

ちん治(ヲサメ)めて院のおほしめしはやうすもあれかしとのたまへは

花 院乃おもひしまさん限(カギリ)ハ彼法おきてのまゝに宮のまへさん

ことも我やうたまふ法ときこえ給へと申さはこゝにとゝめ給

ありける法るやうあるまとこそ申させ給ふも

さらにもこれ人をもおほしくおほへ出てうちまもりゐたる

め給て 朱 源氏も朱雀院とひとしう涙を出してなけき給

そうとも

あまりほとに無かりえそあらふとなりけるへく女三宮に申

されたひとゝくれついとぬるさまするおほゆると

朱 朧月夜も車のなきとき女三宮をまたれしまさとりておもう給へ

ここそれ人をはさん源氏乃心をもかくれてぬるさまそうとも

花 ほいなかりきこちとハあさん乃ちりもまたからうすれ女宮とハ色(イロ)

こゝ(コノ)のちをやいつまてすてもそまさをかけかうとくれなり

やうこ 細 我ハあさんのまめく存しあり朧月夜檀(アイカホサイ井ノ)を出家しよ

もとくまてあるまうるや

こうし此むすし待たりとも宿ひまうち女へきさんにハおもひねと

朱 源氏のむすもそまてはゆにさせ女へきまへなきれとも朱雀院

のちまも遁世(上)し給御源氏も女三宮乃ここにとの給

ひはくる法むさんの義たるにうちつきて源氏も出家

あるし給へとも女三宮ともに朱雀院も源氏も乃すそてとや

うちあれともむかしさたにとさて源の遁世し給ひるをも逗(エン)

引し給しとも 花 山の法の乃法るまや

いさからもそ給さん世のしろにゆかりとも給つる法んさん

乃義なりうまつしうるしともさ法さ心あそそひさこゆるや

うみて恨みなし涙き刀もてなまんせとのあしちくおほ

さまんは涙こてなん 弁 朱雀院法御家乃つる 細 女三

をとおもひやるなるや
おくるしやおもひしくてもつきもなきてめぐるゝほとしきら
つまたゝるも侍らぬを　宗　夕霧明石姫君なとをもいつきましきも治
まつりごち給へは源の出家は程もとかなかなとの心也
女三宮もかくてゆくもよき八ましりくまれともなくくらうもとそ
ひ給ぬれは　宗　明石姫君のこともよく治まるらちや
きつくは乃ちなにのとおもくまたも見えまさるへし　宗　明石女御
の后かたに侍るなくはと見えまさりて源も遁世し給
りんとや
そのほかなれもくおんよきてうひく　宗　紫上明石上花
散里なともはかりまても世をのかれんとも　数をもみる
たまふ給ふるんてもちたまれなくの給へり　昇　常にはれん
んやとゝ

まのとものに身をまもそれんもわすれぬはしさよりひたふるなり
けるなと　細　紫上そのかれ我身まろともに出家してをなり
ふく数年とや思く女三宮一人はんとまれ給ふとや
やうくきくしく思ふ侍り　宗　源のんのまれくしきこと也
院の治代乃様りひかしくてもおもひもしいとおもくいつく
ありまさちなと給て地心やそまきりのことわりあるに
宗　山乃治の此不解かちたなるこしと也
そはしくにあらぬなる治れもえやそて治んりのなし給ふて
此世をいとゆきとくるみもかくらて　宗　女三宮乃おしさこ
ありたちちなとし給て山の治乃治んとなると給ふとや
下此句は始末此ことを合ての給へり
後の世は治乃治まさそもなくんとも侍らいとわそろしかくん
なると　宗　此世のことを地のうちもあくまて又治への事ち

のさたまりとあり給けんとや
さかまきるゝやうにあらし給ふほと　箋　柏木これをうけ給はるに心も
の給へぬとや
はくも思ひつゝ給にあまりそのこゝちもまとひてこれはいかにも
なかしきこえて御迷も　箋　女三宮のさま也
猶もうちなる御心にて　箋　源氏もたゝさる給とや　細　薫
人のうへをきくもあはれにも思ひ出給ひし　細　薫君人をもそれを
むかしくおもひしとや
あらん人のさまし中よりふかうるゝにしそ心にうつりそのあさ
なをやともうつくしうるさしけんそのつくんとちち給ふはた
もうきさゆもを給てもつくとしもやなとをとるとものする
ひ　箋　薫源と人の教訓(ケウクン)しなりし時もうつくしう人にさ又
女三宮と源の教訓し給とはぞもうつしき翁(ヲキナ)やとう

給さえんのをひ給けんとちち給とやあるへきは給く
らとは古老(コラウ)人の教訓したるおとゝいふり
うち南まゝり行へと源てもいかにもさへてうつくしき給へは
細　院乃源氏のてゝ也
気こゝろあまりしをつるをはとうしし心もはくまんするよりて給らん
うとおもひしゆるたいゝとみてくされはまるい乃ことをもさめぬ人を
迷ともいとちるとをもしく人にゆめろくをなまり給　細　柏木のあいるす
おもひやり給也
ありけんるをはこれ月ろくても夜　箋　女三宮乃山臥法への
法界へりありけんとの袂と月をもてする也
細　静夜乃袖
二こゝ乃院いさかひことみくまうり行なるを　箋　蔵薇(コキバ)宮は
事也

あるめりこゝはとこゝ毎かくたちあはれんをとさう
つとある心ちしたり 案 女三宮は懐姫の腹さといへり女三宮
の御あにこゝはさうきく案給へりあにそひの御まで案
給ふらんをあはれなるらんとや 哥 女三宮は此は御とこゝ
給也 畢竟下也とぞ 細 懐姫ゆへ此ところおもふへ給とや
霜月は三つの此忌月なる也 案 桐壺院の忌月の事也
源の院はさし此月なれはこゝろしと也御ハ文 統有 女三
宮は母上の忌月也とつ 細 みゆる源
の又桐壺の帝は此忌月也 又是朱雀院の母までも
年は掲さるへし 案 十二月は又のさわりし
一さころの事也
まさつとく此はたぐさ見しるし皆まちこ給ふらんとのこ云ひ
御れとはりとてさのこのくへさ事すやと

案 女三宮の懐姫に急て進給ふさまなく山の院へ参り
くれは院お母としまちかね給ふらん祥を見くるしうらむ
とや 細 懐姫のまとうとや
むつましき感れ侍らぬもあはれにまてなし給て此
いとくねむもを給へるはくらひ給へるといとらうめしとさ
もとに見らまし給ふ 案 女三宮の院へをあはれにまち給
てはくらひ給へと源氏はしく給也
院の書をみたさに毎のこともあもゆへはるへさわりかしあそ
そのくもさへとなくにまうし給ての給ふをはのたもしと
案 源の心也 柏木をとかくやうたるなるかもちろかまその給
ひあまきしくへとや
給くたる院せうそこともなし 案 柏木に言寄せ給也
人あやしなと思ふらんとお怨むを 案 源氏は院の御案たるへし

柏木ハとうとくしきれハ世の人不審せんとも
見んよつきさくもいとくほゑくしこそうつくしうん
みえ又わうこゝろもたくおゝくきやとおほしめへさまの
宗 柏木此源氏とみん給くほゑまのとおほしきんとも
細 女三宮乃おゝるうこそれ心すくおきゝしとやおきうれ給ふ
んとや 弄 源の法主とたまれくしとやみんとや
女三ろう源氏乃んも
やうそ月法まいり給ひぬとものかめあらし 宗 柏木此醍醐下
あらまそてよつきやうその月ころより柏木此源氏へ文書
ゆさゝるとや
えうゝのんきあるとまんたゝしきてあゝやとおゝゝゝ
宗 世上此人ハ柏木も病中也又鶯上もまうくれ給ふ
みまく法遊るとももあれとも寒り給ひぬとうや

院りのさ法あそひるとたまふやうしきれハとのこおほひ
くるゝと 細 鶯上あゆこ給ゆへに法遊ともあうれよ法身
たちのともたまふゆへとくんとあるゝや
太后の兼そあるやうはるゝのたまふへしや 宗 兄宮の南
前陵くともおん給ふ夕霧此みや
もれまのハさくとめて 細 柏木此事 宗 さまくて夕霧の
給へり
わうゝゝしおとうゝしおもしにほとのそぬをや宵久んとおほひ
よれと 宗 夕霧此前よ論の時横笛と推察しそれ
ゐゝと柏木此そくへ思をぬくとや 細 猶乃ゆへや
弄 猶のおしきと出しとれ乃ゝゝ
いとやくさんにのうつたれさ何あうんとハおほひかなる給
いさりあるゝと 細 めくのいうあるくやきまてハひよらさるや

弄 夕霧の心すちも柏木の気色もとこ実義なるとの事なりと
　思ひよるまし行なとや
十二月はかりに思ひ十よ日ほとさためて まひともおほし
院のうちゆすりてのゝしる 弄 十日あまりと聞えし山の
　御かの御賀なれはなりや
二条院の上へまうてさせ給ふなるを待給ふ時はかり
てんしやうのきこしめしてつかうまつる 細 紫上も伴ひ行也
弄
　紫上に対してとはいふ六条院へわたらせ給ひぬとや御賀の試
　楽(カク)有ゆへ也
女御の君もさとにおはしまさは 弄 明石姫君も御産(サン)と
ゆかし六条院におはしますところにて女御ひとしく男み
　こをうみ給ふ宮となりや
たいひとりは又おほしくまゝちかく女君おはします 細
　句

二宮の宮や蕊は一条の宮やうちまつりさきて薫ゑ
　のをさなり
おもしろうと待りきてにぎはしく見る事を待きさせかしてあそ
ひたまひ給はあんないとゆるしのたまはしうきしくおほされ
なる　おとゝく 弄 深く上の詞也
さうくに大殿の事のためにもやとと給ふ 弄 紫上の御ためにもやと
　給ふ也
大殿の御さうしとはまちかく 弄 花散里よりもちかう
　夕霧は春宮母女御の子なりと紫上とおなしう給ふ也
まつりちかくなりてさわかしにの御方にはまつらし給ふ事
　進上 細 花散里の御方にも此まつらし給ふ別に試楽あり
　給ふへく出し進らる也 弄 うちはうしや 弄 綱試
　見聞る也

彼ほうしハ我まへの物ハ見ん給ひは悪き事をとり除との折り
ともかしらをたれんハひとへにすくはかくしるへき
宗 花落葉ハ前の我ほうしの芸古を見る給ゆへに南日見紫
をいひ給ひぬともこれも試楽のことなるへし
昇 夕霧の花落葉のうちて洞楽(ていがく)し給ふまなをて源の
ほうしのうちとも又ほうしんしあらぬとといふ
一所ハ絵くる見給ふ也とて 以同
うちまへあやしくうちおぬへきなりけれハあり給へき
よしありけるを打見てしるうちかて気しくもきは給も
そこちらやうくるしきをたちうやうひめもあしくさあるをと云
んのあるにやとおもふるしをおもひて 宗 是ハ梅亭(きんちう)也と
にあらまし梅を二つめにま中にとりつかんとこれ試楽あり
梅木の影りをぬとも見るきれハ人のあやしくおもふらん

ともかくもかくとハ不審(ふしん)をうけるよし
とりもあまて行せそこに侍らハ 宗 ふしてめし給ふ也
ちくおもへともかなでかへきたぬやきされける 宗 ちかにとて
気のつましさよりは落夜るにや法のうてそとの給ふ也
ひりくしきやうの院すもこゝろしめさんとおもはるゝしき
やまのひめもあしきも体まて気り行へともそくのうち給
そうかくうきねくの給へ其道ハくるしきを打見つく気りぬ
院めもこゝろしめさん 宗 源氏も不審し給さん
とや
宗
まさし其道アるとも情ひ行のあや尓となるきとり
うらくハいまさき気り行のぬよ梅木のまゆく気り行く
仕合乃まうくさ心也
是のおちうむこはのうちすい其道給くまやのみをおもひ

てあつかひまゝ 案 源氏と柏木との常に御中よかりし
ちとくにともそもあへしらひ給ふさまや 案 柏木我さまや
さだにいとゝくちをしくおぼえて
御もてほうけたまへれやうのみちはなにとの君たちに
ハまさせされて 細 平生も思ふたまへるとハたなふくめ
たゞと一しかさありたるやうなりや
いとよろしいありつるにしつめぬるはさそこともなるといと
さいめて給ひかひ給ふ御あるとらん 案 実(じつ)しくしき物を
いへり
清さらされ清ゝらしくにさしかしく〜にさらんまゝにさとしく〜にと
うあるまじきと 案 女三宮あるとの様見るにあらへたり
さらくあるまじき柏木とや
さくるれさ御のされくもいとさひやりたまふをそらいと

清こゆるしめくられるとはあさまれどさらるまじきたゝくい
とるつらし 細 不便(ふびん)のわざなるかなや 案 柏木我やうに
うちかへしそのゝとまそ事我やうにものすれてさき
行へとも下我をかへゆるしつるまとの給へや
そのときあすてさいかんをいとひさしく嫉み夢の俤
はいかくの御やうさとゑみあけかひんのいとさするにも
とい 案 源の詞也 柏木ありさしむかひ給ふてのこゝろ
思詞ありうつたなるべし
院の御覧ノためさしに物し行みこれはるはべりまつ
思ふ給へくなりしとつきてとくこゝろ思ひけるて
案 女三宮の父御かれ御覧乃為(?)清るまそこちう給ハ
むとのるゝや 案 紫上の病中女三宮の懐妊まうつ
て御まうくるとて西行かや 何 月也

かく年もせめつれハ　案　十二月すりたゆるをいふ　河　迫　せゝな せゝる
こゝろをひろくもしあるへく　案　てもをしとおもふなるへし
くるのことくちきりあねの法をちきりある人へきそと法をいへるもとく
心もたおもふくしさやうなすれと　案　精進（シヤウジン）の法をき肴（サカナ）ゆかり
気多へことゝも　細　院法家まてましませゆへなりや
家すわひ出るさうらへのうをおほく奴まらすと出給へん
せさせんとてまひちるとあるらうしつきてめしあるを
まもたちさきさんとて柏木のへんと　案　源氏の法事
子孫（シソン）繁（ハン）昌（ジヤウ）のきすをいへり　細　源の子孫也
又雛のうのおちそひめくらしつてあたん月はとかへしひ給し
行きぬ　案　柏木のうへかおそひめくしてもたえぬと
のんゆ也
こゝにもさとてあるとの給　案　此時柏木あるし給

こゝには八あれとも楽（ガク）のうちに事闕（カケ）あひぬへし
とも思給とや
法ありしきれうしたるやうあるもいとくたちつゝしさたに
かの御あそひのかゝんとおほしてさかへもとこにえ要
えれ　案　柏木かくせん也　卿（イサカ）も殊くをあをにより源乃御ま
表現（ヘウリ）のあるやうあそ乃御給をぬ法き御事也
月ころかさくすまお月しちむかはすもう御給をなけき給
まをきくまての法ようまつりもまいらひ給　細　柏木此夜するすり
なりは女三の宮あるとの法事のにて也　案　柏木此の親也
宮のうへゆくれるゝや
こゝろさくひかとふかれとこゝろかく柏木まてつくひ給へ
なかくもあるとこたへとも給しも月ころまたへてくる
つゝ給ゆくるとん内あるとおもとも事しも世事限なくしあるや

うるくこまを侍る　案　脚氣と持病よりおこると也
河海　和名云醫家書有脚氣論　脚氣一名脚病　俗云阿之乃介
うつかすみ源中納言嵯峨院氣あり侍てみまかりく
ひやうしさもなきに付てとあり案するにこれハ病也
名とミゆるなり也　世俗云三条なとにも風病ともあり
ミえ　花　かくひやうハ癰病脚氣の事なりとあるハ
まことに病のうちや血氣乱て病となるゆへ也とかく
くしくいふと云くるにとも侍しまたいふは脚氣の
よしとも申侍りて　弄　脚氣の事まて申侍らん
ちかきといふ心也かくひやうハあなかちにもとく
細　脚氣とミえて病は世に多く侍りと思ゆるに
脚病ある也
院の御よりひさしく侍をしたまり　案　菩薩涅槃十まてなり給

はかなきのみ也
人よりはさらにかへなきいはりましきそへさよし
案　柏木の一番めにてこそさんとてもうとくとハ院の御
年比とをのみ
ちかくのおもく思ひとりひかされしを　案　存知にくれぬ
るとのみ也
かゝるまひきの事車をたてしまいてすくしなさてもそえ
はゝかりまつらんと
細　致仕大臣なと　案　致仕の表なとをもしとまり
侍く不るし
いかにたびより不りしといふ院あり
御座ハ右大臣座せん不るしとふみする也へし　案　此間逍遥
八致仕の表をたて後の子息ハいかなるへきとはなし
院度ハ右大臣座不との御すハ内同心なりしや惟光
とかふ候やされて此比みえりて見よあかぬと

こころをかけしと此侍りけるに　弄　致仕大臣を嘉せん

けちかくしもえこそ愚案(グアン)こ

まだ下らうなりしとも　箋　柏木卑下此詞也

おろかならぬ志を南所侍らんこそ此心深く侍へりしも又とおもよ

聞しめさんこと此侍らん　箋　女二宮をあつかひ申せと

云所ある故に此人を憐んせしと也又ともおもはし　中よりて

もとの侍らんとは山の御かよ云所ある故を見んとなれど

父おとど此柏木をやまよくあつかへると也

われも病をあひそへきてまさりて侍る　箋　柏木

の病中なれとも山の院へ藤裏の御賀此時の為に侍

とかくあるに　河　今日(ケス)正朝(ニサニシソウ)天文(アメカミ)賦(ヘニ)可(ニ)能(ヨク)抜(ヌク)病(ヤマヒヲ)惑(ニハラク)來(ライ)由(ユヲ)

白氏文集

今はかくいとかなるけさに我もまいりて

細　云ひをきてまいらせしは大臣の思ふことを肯聴(カイリヤウ)せられ

てまつるべしとや　孫　朱雀院の御祈祷なと云

箋　山の座主此御祈祷を柏木此為にて見あまるなといふ

ゆかしさ御よそひをまちうけ奉り給はんとす

しくと打なけきまし見奉り侍しをとこことにとぞ

うち給く　箋　此御賀此ついでにさらは閑居(カンキヨ)し給ふ

の御心に侍らひやまいしことや

志ひかれる御気色さら此御祈りのひとつをせん

なむまいらて侍るへきとや給へは　箋　御賀のついでに

略して静(シヅカ)なる御気色ありけりの御祈りのよ

はかれつんとや

ゆかしくこさし御賀のことと女二乃宮此御ことさたあり

はかひたさむとあらそふとおもほさと　箋　源の心也女二宮

此法会しけるをハいかゞ源のきゝ給しを柏木此
さゆうかんかゝりておとしれたまさるよしたまふやうなりらひ
なりし給を源氏のまへをほめて只今のほとけの御心也
弄 女二宮此法会志給しを後任のおとく比ゝうちらしに
いひなして女三宮此法会のおくへさゝすとハいかゞめし
くさゝを源ほめ給ふと 細同 源のいうさしと思ふべく
いひ給ふ也
そもかうあんなるそまゝ御あるさまに 細 何事もと前駄（セイリヤウ）
給ふをかくいつかしきやうまさりなりつ給へれハよく
とくの人さまとも也 弄 源の相果（上ケ）下也
世人をおもくかゝるへきを 宗 此法会をとゝそさまし
給を世上此人を御感あるなとゝかゝみんとも也
花 女三宮の法会へともをかをもてなしくもたまるゝ中う

ま柏木の中給ハゝさ人してやとこゝろえ給也
さハいへとおほえて猶をしらるゝに 宗 さりてハおほとゝも柏木
ハ万略（ヨロツリヤク）して志るへきやうしやたちてく也
法さんよりもすんいとくおもひあきらかなる 細 されハこそ
世上みえし此法会をことゝしくいひたてよとおほされ
や 宗 源も法の御心をとをり給へいとこそさて柏木
の是見（イケン）此ともく法因ひとつなるも也されとまきとハ源をさ
やうまおほめしめしたるとの心也
志ぬハわか御事をかくされやうにかすとさへめれと 宗 夕霧ハ
才学（サイカク）又ハ云なるをとれかへをとなしきさへとの給ふ
かうやうま情なるかたかれとつきまうすやおくれ
宗 勢縁なるとのかくされもとそうち又宗ハ初紀心たるとも
されとこれ色果（上ケ）下まやされハ柴此かるゝを柏木り

見あらはしひかへてなり
彼院なとにもところせきよのけしきをおほさくるな
さこうちあるもかくれなきのみこそ心くるしけれ
きりとくの御けしきを
はしそ打すてたてまつるやうなれはつくにおほしめしとく
まかきんなるかりしとおほんはゝひかしのへさき　孟　山の法門
さもらは朱のかたきにおほ家にかへりすておほしとめて給
御にこそらめしきをまきさんまれたることろのひま
らまてなとや
彼大将ともろともに見つまつてまひのこころへかなはしき
ちへ　孟　夕霧と栢木と見たてまつるひかへしとや　細
よくかへる事とのくしるときにけ給はそうまつる　足ノ
かへる事とや

さてみることにそあまたゝひとくちおしき御ありさまなと
きわりしを　孟　楽人ちゃと舞給たる数斗は法家と大
かたはかれとも御くに風流なることゝいはれたる物そとも
の給ひはつるをうまつしさ御くるしくはんなくそ
ちともくれみるにこれ若菜へとてくそこちらんとそへたまひ
のやうにさやうにもあくしてやうくをえかへそぬ
　孟　栢木此ころ也
きんくれなとふるく大将のつくろひかなし給くへまひん
のさうそく此るまちると　　花　花散里の事也
又くはかるひくらく給ひるへきのあかしくはくしかし給
ろるにいとくろしこさ心ちしひそかも　孟　栢木此見て給を
くらく給也　弄　栢木此打たるひくらく給かし
きにはうちへいとあのかくはすそ御しかめる　孟　夕霧此君

尚花やかにとて律くしてし給ふへしにいとく梅の木は是なり
し給へは梅の木は此なるよもしあらんや誠にさうに此事也
まかせる所ところも此日たるれは 案 試楽の日なるへし
清らに色擣りん給りんまかん侍るへはあらしきしとて
案 此義しとをしめて力ん給へられと本意おれとや
彼清家の日はあるきさしていつるところひそめ此下さまを
こまるへし 案 此律るところと蒼裏袞ふよに にうらしく
のを侍るやうされと秘不入秘和秘抄ますてはや
もらくと見んとより赤色ハ青色の袍のことゝいふとらう
えひそめやをは出あらこ此何るらや未摘とてま色に侍
しヲハンヌ 花 承平七年陽成院七十賀、舞人、舞人脹
赤白橡袍蒲陶染下襲一ヽ
めうもしあるとえみつくもそのつかさね 案 是は試楽の日此出立也

河 青色麹塵也 綾 葡萄染ここ
舞人三十人々やはえしくさねとこそゆるき 弄 舞人舞人の事
きらを此くのはらそのまつくよたらうをとかくなりして
出る葡此をそよりもれいかれへろくとせんゆらうとこのあそ
ひらく 案 楽の名也 仙遊霞 弄 仙遊霞也
ゆきのさくんとゆくらるにまとのこかかりちらく梅のさしよよみる
みひかりて侍らもなり
古 色なくしまは此あかりかちらもされは中々此よりそ花は散らる
河 白き色とおもふむ梅乃花とこそ我も思ふしと打てなるらむ
ひさしけもとのうちにわりしまは 案 源氏のるゝ也
式部卿宮太のおとくさるらはいつしひ給ひらく 案 舞其乃上官
と先上此文式部卿宮と源とひとりり侍るとや
それよりしとの上達部はものこにわさとらしぬ白のことに

て　案　久しく嘉節しけるん日みくるしきたゝよふ也　伎楽の
　くといへり
ミあそしあるときちらし拍子はまつりつちうしたり
　案　此一獻也きちらさハ御座にちらすき也
右の大殿の四郎君　案　舞人ハ四番め玉鬘の腹也
大将殿の三郎君　案　夕霧の三番め乃息也
兵部卿宮のそむ王の君たち此二人ハまんさい
とちいさきほとにていとらうたけなり　四人なから
なくたかき家の子にてかたちをかしけにかしつき出たる
おもひなしもやむことなし　案　兵部卿宮也孫王ハ王孫
　とハ山儀也不世まて八孫王とも也
又大将の内侍のすけはらの二郎君　案　夕霧の二郎君と源
中納言の息とハへつりしやうといふ楽を舞也色ハ式部上

　乃父式部卿宮の御孫也
式部卿宮の兵衛督といひし今ハ源中納言のみこ　右大臣のお
ほいとのゝ三らうきみりやうわう　案　舞人此陵王也此ハ式
　部卿宮息女北の方の腹也
大将殿の太郎らくそむ　さてハ太平楽喜春楽なといふま
ひとゝもをなむおなしきいゑの君たちおとなたちなと
まひける舞ハみなそのまゝにて暮ゆくまゝに
　案　夕霧此息落蹲を舞也雲井雁のことなりや陵王と落
蹲ハ番の舞にてかくれなきいろうしき面にて舞也
いとはしくきよむしきこれ君たちのこちをとりくま
ひのまうしをせうえ入たる手をはなしておほんしてまことの
てれうきりをましへかへるに　案　孫なるハ舞と感給也
　細　皇麞を舞人也

あはれなりしことゞもをおもひつゞくるにおもひ給ふことも
いとおほかりしをおぼしいでつゝ御心ばへにおもほさるゝ
おぼし給 宗 師走の朔に源氏の御かたへ参り給へし
式部卿宮にもまゐらむとおぼしてまゐられぬれば御ゆるしありて参りたまふ
まゐるまじき給 参りかたく 宗 源中納言は息子なる也
あるじの院をかくれなき御ひかりとおぼすへくは 宗 源氏の御事也
たひたひおほせらるゝゆゑにたまはりたるなれ 宗 源氏なるへし
万 うらうらとつゞくるのみにて酒のみて酔たるやうにもてなして立給ふ
万 世間のありさまをひろくたのしまんとて立ちかへるにはいみしくおはしつゝし
同 たゞまゐりておほしひたるは酒のみて酔たるさまにもてなしたるよし也
清げなるみすのうちにてほのかに見たてまつりていと心くるしや
宗 柏木は源氏のみ心ひたすらにかしこまりてはゞかりたまふやうに源氏の
給ふ事の下にはおぼしめすさまのあるとてなりとて也

弁 柏木はいたく酔たる也 細 なにとなく其の心也 抄 柏木はさま〳〵と
次第にやうやうまぎれもなくうちもてなさんとも也
さらぬ事にもいふまじきことにいふなりけん 弁 柏木とも年の功を得ん
とも也
なつかしう侍りけるに年よりとものありさまはならひてうつりかはりて
古 さらぬにも年はゆるされぬ事もなくなりゆくさまをいひやるべきことなるを
うらみなき給へり 宗 源氏柏木のことをかく給ふ也
人はあまたあるに人のおとなしきいとしくおもふにもいとまほしかるべし
なれは 宗 柏木のさま也
かくしいふとも身にとまりし心ちもしけるへしとも
宗 案をとも見給へぬとや
さしも給はぬ 宗 さるとは見給へぬ也
そらおぼえして御心の給ふさまのやうなれといとしもなきはる

まてさる月のめくりくるをもしらつく我は世にまして
抄 源の宮酔として柏木を嘲哢（テウロウ）し給ふ也
まして心の中に思ふらんことを涕泣しとりあへて
細 酒よとものこ給ふぬ也
まなきをあらしてひくきる給へきかしかるくゐきに
らつさ海たへくのへのこもひかしくちうさここそ見えてたへ
かくまれて 抄 柏木は盃をとひくをきて源氏をみ給也
まくこしとも見えてぬりしまかて行ぬるまくにいとつくまたるひ
てましのいとおもろくしき 抄 沛遊（ギヨユウ）あるところにてぬるは柏
木かくや悔給とも 河 明頃有留呪咀（ルシユソ）之一条院之由内竪（ミタウ）
解白（ゲハク）以石給石明暁書石向北明暁帰家吐血（トケチ）死云々
見栄花物語ニ有之ヽ細也
ふかきもおしぬきといふあれたるあなたんはましとかと

ふかきにきのかりぬるとやいとさいつかるをわくもくきにまよ
つさしへおほしぬをいかひたすくるも宿あるかれとるつらこひ
ちしる 抄 柏木のこゝろ我かく酔（ヱヒ）たるかとにハ酒をも
まてぬてり見いとと思何とて酔ぬるそ不経（ニヨセ）とれて
しむ思ふ気のあるたるゆゑあり見給まて悩（ナヤ）みくさ
るすみくへたるまといふかひ給たるかれと我方なるら
こひまつしるかも 弄 柏木上戸なるへしとハおもへ
酔給とも
ちりしのこゝのまとひみもおしきるところやうていとこくまる
らひ給ふおもしくまかうわ所しさつそ 抄 其の時の酔又
八時宜（シギ）ハ迷惑（メイワク）し給ゆへまてもなくそれまてうくまる
らひ給とや
よそくみてといとむつかしかるつしやて度まわてしなり給を

宋　女二宮の過るよからぬ事を父御門もきこしめされて柏木
を奏はせ（ソウシキヤウ）し給ふとや藤壺宮の御方ゟ本へ一条の宮也こゝ迄
よりわかちて給ふ也　新　一条より柏木を後住の大臣の
方へわたし給ふ　細　一条の宮藤壺の宮（給ふ）まさしまさずとて
よき給ふ也

女宮のわたりしまうき夜又いと心くるし　細　藤壺の宮也

宋　女二宮御給ふ夜思ひきる御心くるしきとも思しい柏木の
乃ちめ也

事たえてもうへき年頃さのやうに　宋　柏木此心也前に
藤壺宮よそひたまふ時へありまゝもあつくてたりつる也

あひなきものとして　宋　此事ひとそひまてゆうえ一度ハ思ひとま
さんと思ふかひ有行末をとめのこたるゆゑんと也

細　此海とハゆくをも思ひとをすひしに今の後悔（コウクワイ）也

いとしもあるまじき御心さしなれど　宋　前にハこゝろざし此あ
方たふとくもと云り

とてもかくてもいとゞ人さわがしくやともて煩ひて

古　かゝるそめ此御きよらもちとても思ひしとハ限りの心ちで嘆きもし
よくまぎらし給へるをいとゞ思ひし事をたすねさとさらしとお
もふ　宋　女二宮をとられてなげき給ふんずると柏木也

うらしきをたすくべき事とや

母宮も心もとなげに給ふ　宋　藤壺宮の母也

世の聞えをもおやとハ嘆きとる柏木をさきたてゝ後は
あらしいふとあるたよりもかなしきにて給ふをなくてこそ迄
いのちのあれ　宋　消息依乃詞也世のなしひよりやう此病中に
も親をハ隠（キヤウダイ）し給ものとも思ふ親をハおもふにさるゝ
ハあれどもまだ婦の間ハ父すこしなれ共母物なるに何ゆゑ人

たえしいのちをとのものはつうり 弄 母御息所の詞 細 柏木よ
の給ふ也
かくおほされてさもうつくしにまの御行まさることをもくし給らん
かんはくしまうる人へさいことをおもうしうくてしら給へと
宋 柏木ノ女五ノ宮復し給ひてそくれてわらんへとおもうしと
まをあやしきもまうし御経をもうろく給へとの御息
所乃詞也
おもうふにも御几帳をそてかんまり給 宋 御息
所のなき也 細 柏木ノ衣かへ 宋 三の宮を所ノ給ひとみとへ
あとうきや
やとの柏木の也
数ならぬ身をそてならひうらん御あつまうしひとよゆ
されなりて御ゆうの梅 宋 女二ノ宮のつくましきハ柏木乃

さうひくうちし中とをもならんや 柏木ノ詞也
あるしみそしなうく世を給てうひたう几多ノ御とももくし
とひとしをなるもちめとをや御給えせうちにまそう給
へ御まいとかうくらく御人あり給まさもかなむさしう
ありけらんしうててをもや御給あんとおう給つらむ
宋 色ふかうしたる梅のあるしみえあうくへ女世あともあらそ
宮御たるとももふむさと思らんしきんとおひしまうや
うに御のさ梅ありて行との柏木ノ詞也
とまうましうる几巴ちまうも 細 柏木ノ命のこと 宋 来ノ命の限
うるたとしや
えんゆきそゆるまうしをおもひ給へうるとうてもにさき行て
宋 あつくありうちまとをうちれさりりみてえゆきゆるま
しさゆや也 弄 女三ノ宮の事をそて八ゆきゆりうる几と也

えうるるも行ひて 栄 柏木れ如くの泣〳〵入りけるや

まさ母ふのうらうめくく枕ほしくるとうまりけ見えんと

ハ云ひ給ふかましまし 細 柏木の母や

我をさくちもまくしまゐんあしきそんほそおさ時く 栄 柏木

の母乃ちや

あまくれ中にまりとうとさてゆらしくとそのましくと

とてお阝し行人 栄 柏木れしくとうつりさてやかに侍と

てまいび母ありみえしむとへ云ひ給ふ女そとや

かくいとおもつれきこしく情ありし給ふかとまくらいとことり

なるを 栄 薫木の非(ニ)ぞや

人よりさに娘けるちらめつるやとつりこまとそてと云ひありひけるを

となれくしし給ふく志りしとみえし女をハら給ひしきゐ

にし給へハ心ちれかくうきるまとん枕ほゆらありしとみえんかまく

さこんはさかくいかまうるへし人よりさま嫉みうきもちゐ

細 柏木嫡子(チヤクシ)也 栄 柏木の心也これハおほよなるゆへにやと

てまことにおほく謳(ヲンゴ)りし給ふとや

今はと云ふのとあくこきうも給ひて 細 薩葉宮へ申給や

いと思ふくわらも給ひて清絶ををようみしきてまことそへいめん

給ひしん 栄 柏木れとはとききき給ひて女二宮をおもふへたまふ

宮らくかくんせよとや たくと柏木れ清おもふゆれたまへ一

の不孝(フカウ)そとや

あやしくそゆく枕うかれるかよふくきとにかれておもうに

おほさるまるまわりつくんてそくやしくを御遺言の旨れ程をもとむ

らてゆく末なきくのをと云ひ給ひりあるまると 栄 柏木れ羽也女

二宮をお栄(ヨセ)ハ為それとも泉(ソラヘツ)の中性(シヤウ)の涅(エ)恨(タシ)なるにうらふて

云(バサタ)皆し給ふるとも とハく中しきや 細 たゆき角也

なくやらう給ひ女宮ハとまりてとゞまらんとす事もおぼし
られたり大殿にまゐりてもあはし給ひてよ給へりにさへさま給
新 孩住の君へ柏木まゐらし給
北の方ハ宮ちもまた地下の男とゝもとろくしるき北の方ちハ北の方海よりとも所
らも月比物思ひをとも北の方に参りてさうしもるもの 案 柏木乃
病相さの事わかれそそうしくハたりまよとも
いとたわれてきうしつるともとそこに御心遣ひ行給ひ 案 楫子とさ
へ参りぬるや 花 案花物語佐理病悩乃事をいふや 楫一と
きこしめして八条の方もめしつかへひともあり
きこやうく物に思ひまいる事やうくそ見え給 案 常の俗語
よもとひるやうなり同心なるや
北の方の時のいうそく北の物し給へる御中わたしとおもてしたるを
てはとふらひ又参り給ひぬ人なり 案 常代方字此人のこ

やう又こなひ行人ハとのくわたくしひ行とも
うちまうも院するもはとうつくひきつくへ思ひつゝ心ちしく
わたくしを御同しめしくるいらも 案 泣血漣々又山の出家うも
思ふや
いとくしさおやたちの法の事まとふ六条院をもいとくち
わたくしきわさなうとおほしおとろきて法とかくしひまかく
御心うたちく思とも思事給ひ大将ハましていとよろしき
北の方あれとも物し給へる心をくしく参りけさ所へ給
細 内のうち院するもく落ちまいとゞまかれ給へるにつけて
いとよくわたくしあつかるしきと給へるも
清水ハ廿五日よりにまうるを御時の尼んとゞとまりよりまア
乃物くまつくひ行にわやうくなまし思われ行つる法
ひまて物さるまうしさやうなれと 案 十二月廿五日白宅足

はるかにさとほりつることとにあるらむ法もやむましき
ことなれハかやうにて思ひしくまへん　箋 十二月十日あまり
つもりをそて法華経のゑとも　つきへしとそまく
かんなる人々　細 同じ也
旅イ
女宮の御へんのうちにそのとれしくことひとへさき給ふ
箋 女三宮の御ため法華経なれハさのことに五月ハ給てハ法ん
のちもいとわしきことも　細 女三宮也ちとのほうの大
宮まつりのゆへにかく障礙のある也
まんの五十寺の法も経　箋 山のほうの五十の法華経なれハ此
五十寺ハ法をそへやうをなくる也行とも四十経あハ四十
句まいる儀也　私 五十寺の事　細 寺の数也五十ケ寺也
彼おりしまんの法寺みなともまつるさ本此　箋 寺とハ朱雀院
おりしまんの仁和寺の事也本尊ハ大日也摩訶毘盧遮那

とはたゞ日をやゝ也仁和寺を五十寺の本尊一として大日は
法誦経ありて　弄 摩訶毘盧遮那乃法をとなへあられ
なる堂にこもらせとももそてひのこしたるさしさ御あまた人
し古きも近江の経不断雲林院乃みこ常康親王仁明法
まれ寺のさかりの風をとさむき秋露のうつりもゆくり
人のみの此寺の院のさとこゝめやう摘経乃まお阿鼻たふは
御説ありやさかしき
河 天武天皇四年始講法華寺誦経ニ
李部王記云延長七年九月十七日太上法皇四人共
於法性寺設五十賀済舎其儀本尊毘盧遮那如来
儀にく　朱雀院五十御賀なれハ五十寺の御誦経ある也
是常例也摩訶毘盧遮那ハ大日也彼西山の御寺五十
寺の随一として大日は御誦経有とはやうれは寺乃本

なる大日なるよしや、わかりかねぬとこそまうしたりけれ。ちかま
くもて見とめつゝしきやうなれども、ゆへ出来しあるなるや
古今此句をまとふりをゆるしかのんのおのもどいふ見神や
のくまなくて指をさしのんかするや、此字ありつゝしきにつき
て此明和なるとかを指くの字割をとゝへくるを[illegible]菜
儀や不空信用一說云五十寺一になれ名也とくこれ又餘
說也。一寺あくてハ五十法賀への經をなとれまや。花　天慶二年
十二月貞信公六十賀ヘ太政大臣於六十寺ニ修諷誦。永延二
年三月十四日法興院大入道六十賀公家今日修諷誦於
六十寺ニと案内要ス乃時諸寺ニ諷誦ハ年齡乃數を用
る也。寺也。五十法賀ならバ五十寺ニてく法事經なるも
彼わかりまし。寺ハ仁和寺各堂ニする金剛界大日なる
をとこやも五十寺乃法事をもとめちてハ又仁和寺此各堂

ゆてまうひるさるれ法華經なりとゝも此まての結語乃
翹要特也。彼おりしまゝ寺ニも見まり知る也やなの法
を法おりといふへきとかくおさるやうやう此第法莊子
るとの書をわ御をるや。　弁　五十賀へとまう仁和寺ニ灌
きて仁和寺此各堂乃本尊なる金剛界大日やまうびるさ[illegible]れ
法華を緣語と云んをのもとてのとだくりきとめたり
と　緻　此結語古來注もなく、此說あり諸抄ニ見へとるも
不載。或云後漢書逸民傳韓康傳云是韓伯休那と
いへる所乃字同句とて、本經ハ此摘經ハ發端と結句とを
指とりつゝく、可書もとまありさまはかく指ゝくへ
きかてくやうにかなるへしいふをあらくに見えし待
なるそや
後漢書列傳逸民傳

韓康字伯休京兆霸陵人常采藥名山賣於長安市口不二價三十餘年有女子從康買藥康守不移女子怒曰公是韓伯休那（那ハ語餘聲也乃豎ノ反）乃不二價乎